
メテオ・ショック

みかど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メテオ・シヨック

【Nコード】

N3082L

【作者名】

みかど

【あらすじ】

生業は漁師。周囲に細いだもやしだと言われようと目標は浅黒い肌のムキムキ野郎だ。今日も朝から出かけようと飯を食べている最中に誰かがやって来た。：俺が勇者？ふざけるな。俺は漁師だ。けれど災難はそれだけでは終わらなかった。次にやって来た奴は俺を『魔王』だと言う。・・・そういう詐欺が流行っているのか？

※そこはかとなくBL色があります。

《1》

「あなたは選ばれし勇者です」

いきなりやってきた王宮よりの使者とやらは大仰に、朝食の魚をかぶりつきながら出てきた俺にそう言った。
もぐもぐ。がしがし。ごくん。

「……は？」

これはもしや新手の詐欺だろうか？

そう思いながら使者をぼんやりと眺める。

言っておくが、俺の家は由緒正しき漁師の家で、勇者なんて生まれる家系では断じてない。俺の生業も冒険者などではなく、ありふれた漁師だ。

「すぐに王宮においでください」

「待て待て待て待て」

どうやらこちらがぼんやりしている間に話がどんどん進んでいたらしい。

「は？」

「いや、は？じゃなくて。こっちにも色々都合つーもんがあるんだよ」

昨日の仕掛けも見に行かなくちゃならないし、船の手入れもしたい。

「しかし、これは世界の大事です。何をおいても優先していただかねば！」

「んー、それはそっちの都合だしなあ……」

「他人事ではございませんっ！」

「他人事だけど」

聞き分けの無い俺に、使者がキレそうになっている。

「第一さ、俺。勇者なんてものになる気ないし。別の人探したら？」
まだまだ半人前だが、漁師という仕事に気が入っている。だいた
い剣なんてものも握ったことは無いし、魔法とは無縁の生活だ。

そう言うのと、使者はまるで化け物を見るかのように驚愕した表情
で俺を凝視し、じりじりと後ろに下がっていく。

「そ・・そんな馬鹿な・・っ勇者が勇者になることを拒否するな
ど！」

ありえない！・・と叫んだかと思うと使者は来た時と同じように
唐突に駆け足で出て行った。

忙しいことだ。

「・・・・・何なんだ、いったい・・・」

やっぱり詐欺だったんだろうか。

俺は、がしがし頭をかきながら漁に出る準備をはじめることにし
た。

そして、朝の漁から帰ってきた俺を今度は、こんな漁村には不似
合いな美形のにーちゃんが待っていた。じつと家の扉の前でこっち
に向いて立っている姿はまるで彫像のようで、通りがかる近所のお
じちゃんおばちゃんが、すげー不審そうな顔で通りすぎていく。

・・・・勘弁してくれよ、と思った。

「カリ様ですか？」

いや、違います。

・・・と通り過ぎてやろうかと思ったが、このままでは美形のに
ーちゃんは永遠に去ってくれそうも無い。

しかも何で『様』？

訳わからん。

とりあえず、俺は頷いた。

「ああ、漸くお見つけ申し上げました。我らが魔王様！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

何だろう。

今日は厄日ってやつなんだろうか。

それとも、俺は詐欺師たちの寄り合いでいいカモだって紹介され
てんのかもしれない・・・。

澄み渡る青空を見上げ、人生の無情を感じた俺だった。

《2》

とりあえず、美形のにーちゃんにはとっと家の中に入れてもらった。

家の前で、魔王だ何だと叫ばれてはご近所にどんな噂が立たないとも限らない。

父母が死んでからというものの一応、品行方正を目指して生きてきたのだ、俺は。

「えーと、お茶でいい？」

「とんでもございませんっ！魔王陛下のお手を煩わせるわけには参りませんっ！」

「……いや、俺も何か飲みたいし」

「では、私が」

は？あんた俺の家の台所知ってんの？

疑問はすぐに解決された。

美形のにーちゃんが、さっと手を振るとテーブルの上にグラスが二つ現れたのだ。

綺麗なガラス細工のグラスは、この家には思いっきり不似合いだった。

中に入ってる紅いのは何だろう？酒か？昼間から酒？

……この際、もうそれでもいいかもしれない。

俺は何だかどうでもよくなってきていた。

「北方の葡萄で作らせたワインです。お口にあればよろしいのですが」

「……いただきます」

美形のにーちゃんが、緊張した面持ちで俺の顔を見るので、俺も緊張する。

「・・・うん、まあ悪くないどころか、結構美味い。」

「美味しいな、これ」

「お気に召しましたなら、これからいくらなりとも」

これからって、おい。

「そ、その話なんだけど・・・」

「はい」

「そのう、俺が魔王だとか何とかっていうのは・・・何かの間違ったんじゃない？」

「まさか、間違えようはありません」

「・・・何で？」

「お体から立ち上る真紅の気。まさしく魔王陛下のもの」

真紅の気？

俺は自分の体を眺めてみるが、そんなものが立ち上っているようには見えない。

「・・・出てないけど？」

「恐らく、まだ覚醒されておられないためだと。いえ、覚醒されずともそれだけの気をお持ちということは並々のもものではございません。歴代の魔王陛下方の中でも随一のお力をお持ちなのでしょう」

・・・これって喜ぶべきところなのだろうか？複雑だな。

「それでは、参りましょう」

「っておいおい！」

今までの話で何か事情を説明する部分があったか！？

王宮の使者より強引だな。

「ちよっと待って。俺、まだ一緒に行くとか、場所とか、そもそも魔王だっことも納得してないんだけど。第一だな」

姿勢正しく俺の話を聞いている美形のにーちゃんを指差した。

「あんた、誰？」

「おおっ、これは誠に失礼を申し上げました！私は、前魔王陛下の

側近を勤めておりましたアグドメゼドと申します」

「あ、アグ・・・？」

呼びにくい名前だな。

「アグドメゼド、でございます」

「・・・・・・アグー、でいい？」

俺がそう言うのと、美形のにーちゃんⅡアグーは雷に打たれたように身を震わせるとさっと顔を覆った。

え？俺何かした！？

「魔王陛下・・・御自らより愛称を賜うことができるとは、身に余る光栄にございます・・・っ」

「・・・・・・」

どうやら感極まっているらしい。

大げさすぎないか？・・・・・・すげー疲れるんだけど。

ま、いいか。話進めよ。

「んで、アグーは・・・つまり、その・・・いわゆる魔族とかゆうやつ？」

「左様でございます」

「へえ、結構フツーなんだな」

魔族って言ったらごっついモンスターみたいなのを想像していた俺には、アグーのような美形はちよつとカルチャーショックだ。人間だって色々なのがいるもんな。そりゃ魔族だって色々あるだろうさ。

「でさ、どうして俺が魔王なのかやっぱ納得できないんだけど。どっからどう見ても普通の人間だろ？」

「魔王の位は血筋によって引き継がれます」

へえ。んじややっぱ勘違いじゃないか？うちの父さんも母さんもいたって普通の人間だったけど。

父さんなんてめちやくちや漁師が板について、ホント『海の男！』で感じだったもんな。

・・・・俺？悪かったな、俺は母さん似だよ！

「カリ様のお父上は前魔王陛下のただ一人のお世継ぎでした」

「え」

マジかよ！おい。

そんなこと全然聞いてねーし！しかも聞こうにも死んでるし！

「ですが、魔王になるのは嫌だと仰られて・・・ある日、姿を消されてしまわれたのです」

聞くも涙、語るも涙・・・そんな調子でアグーは続ける。・・・ホントに魔族かよ。

しかし父さんも思い切ったことしたな・・・。しかし魔王が嫌で漁師になるってのもどーよ、て感じだけどさ。

「魔王陛下は、手を尽くして行方を探されましたが・・・残念ながらご存命の間に探し当てられることはできず・・・」

「え？魔王陛下っーか、俺にとったら爺さんか？・・・て死んだの？」
「先ほど、勇者と相打ちなされて・・・」

「・・・・・・・・」

んー、俺が漁師に精出して間に世間ではそんなことやってたんだーへえー。

ファンタジーだなあ。

だが、そんなのんびりした感想抱いている場合じゃねーだろ、俺。

「そして、我らは魔族の威信をかけて次期魔王陛下をお探し申し上げたのです。ですが、残念ながら」

「・・・父さん死んでたもんなあ」

「我らの力不足で・・・っもう少しお早くお探しすることができましたなら・・・っ」

「て言ってもさ、死んだのもう5年も前だけど」

それとも魔族は寿命が長くて、5年なんてあっという間だとか言うんだらうか。

「誠に口惜しいことです。ですが、我らに望みは残されていました！」

「・・・・・・・・」

いや、そんなきらきらした目で見られても。

「いや、俺・・魔王とか興味ないし」

うん、平和に生きたいから。俺。

《3》

「興味ある無しに関わらず、カリ様には魔王となっていたいただきます」
問答無用かよ。

こういうところが王宮の使者とは違って強引だ。魔族らしい。

「でもさ、オレ。王宮の使者が言うには勇者らしいけど？」

そんな人間が魔王になっても良いのか？

「勇者などっ！我ら魔族を一方的に悪と決めつけ、正義という名のもとでならば何をしても構わないと思っている馬鹿な人間どもの先鋒役！」

勇者という存在に限らず、魔族にとって人間という存在は相当に心象が悪いらしい。

人間側も魔族に良い感情は持っていないからお互い様か。

「いや、一方的って・・魔族がボランティア活動してるとか聞いたことなし、それなりに悪いことやってんじゃないの？」

「まさか！我らは古より、田畑を耕し、狩猟などしつつ細々と平和に生きてきた生き物ですっ！」

「・・・・・」

うわ、すっげえ牧歌的だな・・イメージ狂うし。

俺なんて魔族になんて全然縁が無いから知らないが、それでもおどろおどろしいイメージがある。

「ん、でもオレのじーさんは勇者と戦って死んだんだろ？」

「前魔王陛下は、人間がそくくるならばとそれなりの演出をしてやるうでは無いかと仰られて・・お祭り騒ぎの好きな方でしたので・・」

おいおいおいおい、祭りかよっ！

オレのじーさん、どんな性格してたんだ・・・

「それで殺されてたらシャレにならねーぜ・・・」

「はい、ですが魔王陛下も相打ちにされ・・・勇者を見事討ち取られ崩御されました・・・」

「だったら終りでいーじゃん」

喧嘩両成敗って言うし。

「確かに、これで人間が諦めればそれで良かったでしょう。ですが、人間は新たに勇者を立て、再び我らが地を侵そうとしているのですっ！」

「いや、たぶん。その勇者がオレ。どうしてもだか知らないけど侵そうという気も無いし、獵師をやめる気も無いが。」

「それはカリ様が勇者の血筋であるからでしょう」

「は？」

魔王の血筋はどうした。

「・・・オヤジが魔王の血筋だよな、ということは・・・母さんか！？」

「はい。現王の妹姫であると伺っております」

「マジで!？」

えー、ちょっと姫って感じじゃなかったけどなあ・・・確かに見た目はこんな村には不似合いなほどの美人だったが、怒らせたらそりゃあもうオヤジなんて目じゃない強さだったよなあ・・・夫婦喧嘩はいつも母さんが勝ってたし、親父その度に半殺しだったし。

「現王には娘しか居ないと聞いています。ですから甥にあたるあなたに白羽の矢が立てられたのでしょうか・・・全く、勝手きわまりない!」

アグーは怒りに拳を震わせ・・・おいおい、放電すんなよ。家壊すなよ。

「人間たちにとって勇者も所詮使い捨てカイロにすぎないのですっ!」

「いや、カイロって・・・」

それにしても、オレは魔族と人間のハーフだったのか。
そういう重要なことは死ぬ前に言って欲しかったぜ、親父。母さん。

「でも、ホント。オレは魔王にも勇者にもなるつもり無いから」

「・・・わかりました」

わかってくれたか。

「実力行使させていただくことに致します」

「はっ！？ちょ・・・っ」

静止をかける暇もなく、アグーはオレの手をとった。

《4》

気が付くと、オレはただっ広い部屋に立っていた。
どこだよ、ここ。

「これからカリ様が生活される魔王城です」
決定事項なのか、それは。

オレの意志はまるっきり無視?……さすが魔族だな。

「アグー、あのな…」

「何でしょう?」

「おう、アグドメゼド。帰ったのか…つーことはそっちの兄ちゃんが次の魔王陛下か」

背後からの声に振り向くと男が立っていた。

アグーとはタイプは違うが、ワイルド系の美形だ。

「サリユヴィシエヌ」

「は?」

今の呪文は何だ? 魔族の挨拶か?

「サリユヴィシエヌ。陛下に対して無礼だぞ」

「はいはい。あ、オレ。サリユヴィシエヌ、よろしくな」
名前かよ!

「えーと、オレはカリ。…サリユーて呼んでいいか?」

男はおやつという風に笑って軽く頷いた。

「早速愛称を賜るなど恐悦至極、身に余る光栄にございます」

いや、ただ単に呼びにくいからだけなんだけどな。

それよりも。

「アグー。オレ、ここで暮らすつもり無いんだけど」

「何かお気に召さないことが？…やはり新しく建て直すべきでしたでしょうか？」

いやいやいやいや。

そういうことじゃなくてだな……一般常識を知らない魔族ってのは厄介だな。

「そうじゃなくて。オレは魔王になるつもり無いから。だから元の家に戻せ」

「そのような訳には参りません！カリ様は我々をお見捨てになるのですか！？」

何故そうなる。

「あのさ…人間があれこれ手出ししなけりゃ、普通に平和的に暮らしてたわけだろ？」

魔族としてそれはどうなんだかとは思うが。

「だったら今まで通り暮らせばいいじゃん。魔王なんていらねーだろ」

「しかし、勇者が…」

「その勇者も、オレが断ればおしまいしさ」

「それだけではございません！」

他に何があるんだよ。

「魔王様には、一族の者を生み出すという重要な役目がございます」

「……………は？」

理解不能な発言に首を傾げた。

「我々魔族には、生殖能力がございません。魔王様だけが新たな魔

族を生み出すことができるのです」

「へ、へえ……」

「魔族の隠された生態に迫る！……みたいだな。」

でもちよつと待てよ。

「だったら、えーとあんたかも……魔王の子供ってことになるんじゃない？」

アグーとサリユーが頷いた。

おお！それなら別に俺が魔王にならなくても良いんじゃない？

「確かに大雑把に捉えればそうなるでしょう。しかし、真に魔王様の御子となられるのは、真紅の卵から孵った者のみ」

た、卵……そうか、魔族は卵から生まれるのか……卵生か。

魚と同じだな。うん。

「ん？でもちよつと待てよ。魔王にしか生殖能力が無いんだったら……誰がその卵生むんだ？」

「もちろん陛下ご自身です」

「は！？」

「もちろん、オレたちも手伝うけどな」

「……どうやって？」

恐る恐る尋ねた俺に、サリユーがにやりと笑った。

「我々の気と陛下の気を混ぜるのです」

「………具体的には？」

「交接」

「は？」

「平たく言えば、セックスだな」

「………」

オレ、父さんが魔王が嫌で逃げ出した訳がすげー理解できたぜ。

《5》

冗談じゃねえよ！何で俺が男なんかと！！！！！！

「俺の趣向はヘテロですので。ツツシンデオコトワリを」

「ご安心下さい。我らは男にでも女にでも陛下のお好みのように体を作り変えることが出来ます」

アグーが誇らしげに言うが、現在男であるアグーの姿を見るに例え女に変わられてもちよつと触手が動きそうにない。

「俺はこのままのほうが良いかなあ。心配しなくても昇天できるぐらい気持ち良くする自信はあるぜ」

そんな自信は捨ててしまえ。

「我らがお気に召されないならば、他の者を呼びますが」

「美人！？」

身を乗り出した俺に、アグーとサリユーは顔を見合わせる。どういう反応だ。

「美人と言えば」

「美人だよなあ…相手にするには遠慮したいけど
ますますどんな相手だ。」

断ったほうが良いのかとオレが警戒心を抱きはじめたその時。

「サリユヴィシェヌ！」

大広間の扉が「どーん」という効果音付きで開け放たれた。

飛び込んできたのは、全身真っ赤な衣裳のど派手な美人。確かに美人だ。

：相手にすれば食われるのはこちら、という獰猛さはあるが。

「ヴァミリュウム」

またもや舌を噛みそうな名前。どうして魔族の名前つーのはこう…

「恐れ多くも陛下の御前で…」

「煩い。殺戮卿」

ちよつと待て、どういう呼称だ。それは、今のアグーに対して言ったのか？

是非ともその由来は聞き出したいところが。いや逆に聞かないほうが良いのか。

迫力美人はアグーの注意を受けて、視線を向けた。やはり迫力満点。

ちよつとびびって逃げ出しそうになるのを我慢する。

「ご無礼を致しました。私はヴァミリュウムと申します。陛下のご来臨、心よりお待ち申し上げておりました」

「…ヴァムで良い？」

「は？」

いや、呼びにくいし。

「貴方の名前。ヴァムって呼んでも良いかなあ？」

そう言うとは迫力美人。ヴァムは艶やかに微笑んだ。

「陛下の御心のままに」

ん、でもやっぱり食われそうな感じ。

「おいおい、騙されんなよ。そいつだって男にもなれるんだぜ」

む。それもそうだが第一印象ってやつが違う。でもここまで迫力美人は俺の好みとは反対だ。

母さんにさんざん迫害？されてた親父を見て育った俺としては、

おとなしめの可愛らしい相手が良い。逆らって半殺しにされるのは遠慮したい。(よく頑張ったな親父…)

「それで、どうしたんだ？」

「殺戮卿。人間どもが動き出したようだ」

「何で!？」

だって勇者候補の俺はここに居るだろ？

「ふん愚かな。代役の勇者など相手にもならん。適当な魔物をぶつけてやればあっさり退くだろう」

「そうであれば良いがな。どうも貴様が下手を打ったようだぞ」
ヴァムの言葉にサリユは眉を顰めた。

「貴様の姿、陛下を迎えに行った時に見られているだろう。…『行方がわからなくなっていた姫君を浚ったのはやはり魔族だった!』と勢いついているらしい」

誰が『姫』だ。

誰か否定しろよ! 近所のオヤジたちよ!

《6》

ややこしいことになった。

人々は、嘗て失われた美姫（…俺の母だ）が魔族に浚われ酷い目に遭っていたとの国からの布告を信じ込んだらしい。…もう行方不明になってから二十年超経っているというのに。

今さらじゃないか？

その姫を救い出さんと立ち上がったらしい。

冷静に考えられる奴は居無いか。…居無いんだろうなあ……

「それで実際に救いに来たら、居たのは俺ってことになったらどくなるんだ？」

「ご安心を。陛下を誰にも渡しはいたしません」

アグーはやる気満々だ。

何だ。牧歌的に平和的に暮らしているという話はやはりデマか。

「売られた喧嘩は倍返しただけだぜ」

「陛下。人という生き物は自分勝手な生き物です。人類という存在を同じ生き物のカテゴリーにはいれない。我々魔族とは相容れない」

「…話し合いで解決する気は…」

「「ありません」」

おう。見事に三人揃ったな。

「この城に辿り付けるかどうか、そもそもそれが問題ですが」

「そんな辺鄙なところにあんの？この城」

いきなり瞬間移動で連行された俺には、この場所がいったいどのあたりなのか全く見当が付かない。

「距離的には近いと言えますが…」

「地下だからな」

「地下？」

「そ。人間たちが地上に国を作っているのと同じように、俺たちは地下に国を作ってるわけ」

「へえ……」

そんなことになっていたとは。

自分たちの暮らす足元で、魔族たちが暮らしているなんて誰も想像しないだろう。

「でも、どうやってここまで来るんだ？」

「俺たちは魔族なら瞬間移動だが、人間たちならトレヴァ火山の火口に飛び込むことになるな」

その火山は間違いなく活火山だ。去年、村に立ち寄った商人が灰の影響がどうのと言っていたのを覚えている。

「…それって普通、死ぬよな？」

「普通の人間はな」

「魔法使いがシールドを張れば問題無く辿り付けるでしょう。事実、これまでの勇者一行はそうしてここまでたどり着きましたから」

ふむふむ。魔法ね：俺とは縁の無い話だ。

「つか、これまでって…勇者ご一行はそんなにこれまで来てんの？」

「私が知っているだけで、5組は居たかと記憶しております。ほとんどが魔王陛下にたどり着くまでに他の魔族に倒されていますが」
いい加減諦めれば良いのに…勇者ご一行。不毛だぜ。

「そのほとんどに関与しているのが、そこの殺戮卿です。陛下」

「ヴァミリュウム」

「本当のことを言って何が悪い」

アグーに殺人光線もかくやという冷ややかな視線を向けられてもヴァムは笑っている。

「陛下。私は何も好きで人間を殺しているわけではありません。そのあたりを誤解なさらないで下さい」

「うーん…まあ、理解しようとは思わないけどさ。言い分はわからないでもない」

あれだ。きつと目の前に蠅がぶんぶんしていると鬱陶しいのと同じだ。

「なあ、いつそのこと俺が王様に直談判して納めて貰うっていうのは…」

「陛下。カリ様。貴方の優しい御心は人には通じないでしょう。それに我々には貴方を失うことは出来ないのです」

種の存続のためにも？・・・嫌な感じだ。

知らず、溜息が大きくなる。

「なあ、陛下も疲れてんだろ。お休みになって貰ったらどうだ？」
一番気が利かなさそうな（失礼）サリユーがアグーに提案した。
「賛成！」

腹はまだ空かないし、寝るにも早すぎるが。

「では、陛下の居室へご案内致します」

すげえおどろおどろしい部屋だったらどあしょうか…不安だ。
ドクロの照明とかやめて欲しいなあ。

《7》

心配は杞憂だった。

俺に用意されていた部屋は、広々としていて居間があつて寝室があつて：（もう家じゃん）そんな部屋だった。内装もガラガラしてはおらず、落ち着いている。

地下だというのに、大きく設けられているバルコニーからは空が見えた。何故に。

「えーと、青空：だよな？あれ」

「魔力でそう見えています。天候は好きなように操れますから」
すげー……。単純にそう感じた。

何しろ俺の生業は猟師だ。天候によっては海に出ることも出来ず、まさに神頼み。

「暮らしは地上と変わらず送れるでしょう」

「海は？海はあんの？」

「地底湖はございますが、海は残念ながら・・・」

「そっか：」

というか、俺がここで暮らすのは決定事項なのか？

「なあ、魔族って長生きなんだよな？」

「はい。勇者と相打ちなされた魔王様が最も長命で、享年1049歳でした。あと少して1050歳の記念祭でした」

「あー、そう」

一体いつから生きてんのか想像もつかんな。その頃、人間居たのか？

「アグーは何歳？」

「私は千と44を数えます」

人間なら化石の勢いだ。爺という分類さえ生ぬるい。

「じゃ、俺の親父も結構イイ年だったわけか？」

「カリ様のお父上は魔王様が晩年に宿された命で、生きていらしたならば二百は数えなかったかと」

まあ若いうちに入るわけか。それでも。

俺の母さんとはどういう出会いだったんだろうなあ……だってお姫様と魔王候補だろ。接点全く無いじゃん。

「カリ様」

「んあ？」

ぼうつとしていた俺は目の前にあった秀麗な顔に口をぱかりと開いた。

さぞかし間抜けな表情だっただろう。

「どうか我らに未来を賜れますよう。カリ様だけが魔族の未来を作ることが出来るのです」

めっちゃ重いな、それ。

「んー、いやあ……そう言われてもなあ」

親父でさえ逃げ出したものを俺が出来るわけないだろ。

「俺男だし。卵なんて産んだことも無いし」
想像しただけで、死にそうな気分になる。

「大丈夫です。我らが命をかけてカリ様をお守りします。お亡くなりになった魔王様も常々仰っておられました」

「何を」

「子を産むことは『慣れ』と『気合い』と『諦め』だと」
「……」

確かにその三つが揃えば大概のことは出来る気がするぞ……。
名言でも何でも無いだろソレ。

「あんたらもさ、俺なんかで良いわけ？」

「貴方で無ければ。きつと魔族の誰もがカリ様には惹かれることでしょう」

いや。そんなうっとりした顔で見られても、な。

さぞかし、今の俺の顔は引きつっていることだろう。

「それとも。カリ様は魔王よりも勇者が良いと仰るか？」

「それは無い」

うん、断言できる。

勇者なんて魔王より面倒くさそうだ。

「カリ様」

アグーはソファアに座った俺の足元に跪拝すると、手を取り額に押し当てる。

「至高なる我が君に忠誠を。我が命果てようともカリ様の為に」

ふ、と手の甲が熱くなり何かの模様のようなのが浮かびあがる。ぎょっとしてよく見ようと目を凝らすと、忽ち消えていった。

「誓約の徴です。カリ様がお気にされることはありません。我が身のみに与えられる楔です」

誓約を違えた場合には、身に宿る魔力の核が碎かれ塵となる・・・己の破滅を何故かこの上なく幸せそうに語るアグーに、俺は眉を顰めた。

他人の命を背負うほど肝太く無いですから。

《 8 》

「さてと、どうするかな」

一人部屋に残された俺は、これからの自分の身の振りかたを考えてみる。

魔王になるなんて論外だ。勇者なんてもってのほか。
どうにかしてここから逃げ出さなければ話は始まらない。
しかし、だ。

「…魔法なんて使えねえし」

アグーのように一瞬で移動するなんて芸当が出来ればよかったが。
生まれてこの方、普通の人間として育ってきて、魔法のまの字も関
わることなく生きてきた俺に出来るわけが無い。

「は…どうしたもんかな」

「何が？」

「っ!!」

振り向くと無邪気そうな顔したガキが居た。

近所に居る魚の餌をおもちゃにして遊ぶ年ぐらいの子供だ。違う
のは、文句なく誰もが『可愛い』と評するだろう容姿をしているこ
とか。

「こんにちは」

「…驚かせるな…何処から入ったんだ？」
全く気づかなかった。

「空間から」

何の悪気もなしに言っただけ。…明らかに人間じゃないとの告
白か。

「お前も魔族か」

「当たり前！初めまして魔王陛下！僕はトューリクエーサ」

きた。またもや言いにくい名前が。

「トールで良いな」

「いいよ！」

「…で何なんだ？お前は」

「さっき戻ってきたら、アグドメゼドに陛下をお連れしたって聞いたから」

「へえ・・・で、用は済んだのか？」

「うん！」

ぽすんつと隣に座るときゅつとしがみついてくる。

「予想以上でスゴク嬉しいな♪」

「…何が？」

あまり聞きたくないような気もするが。

「僕の好みだし、真紅の気も誘惑されてる感じがしてそそられる」
ぎょつと俺は身を仰け反らした。ガキが言う台詞じゃない。

事実、トールの目は男の『欲』の光を灯して赤い舌でちろちろと舌なめずりまでして下さった。

おお・・・勘弁してくれ・・・。

「言っとくけどな。俺は魔王になるつもりも、ましてや子供を作ることも作る行為も断固として断る」

「何で？」

「な…何でも何も。嫌だからだ。俺は猟師だし、男だ。可愛い嫁さん貰って、子供作るの」

何てささやかな夢だ。涙が出てくる。

そのささやかな夢が…叶わなくなりつつある。ヤバイ。

「それは駄目だよ。だって君以外は魔王陛下になることは不可能なんだから」

「居なくても良いんじゃない？」

「まあ、僕もそう思ったこともある」

おお！こんなところに同志が！！

「でもやっぱり、陛下に会って気が変わったんだ」
にっこり笑った表情は、本当に無邪気そのものだが…どうしてこんなにも禍々しい。

「ねえ、僕の子を産んでよ陛下。大切にして…」

「トューリクエーサ！」

「おや。もう見つかった」

アグーがこれまた空中から現われた。・・・もう扉いらなくね？
「カリ様！ご無事ですか！？」

身の安全を心配されるほど、このガキは危険人物なんですか？

「嫌だな。心配しなくても陛下を殺そうなんて思わないよ。アクド
メゼド」

「どのような心変わりですか？さんざん、陛下を殺すと宣言されていた貴方が」

そんな危険人物を放置しとくなよ！！

「：アグー、こいつ何なの？」

「トューリクエーサは、我らの長兄にあたります」

「冗談？」

「本当です」

アグーは、少しばかり苦々しい顔で深く肯定した。

《9》

「だって、アグーより若いじゃん」

長兄だと説明された少年…そうどう見ても『少年』は彼等の一番上に兄であるらしい。

年齢逆転か？それとも人間と違って一番年下が『長兄』と呼ばれるのか？

「若作りなんです」

「違うよ。それだけ魔力が強いつてこと」

へーへーへー。（何だか懐かしい響きだ）

「全く、戻ってきたと思えば無礼にも陛下の部屋に転移するとは」

「お前もやったじゃん」

「つーか、二人とも扉があるんだからそこから入って来い」

「ごめんね」

「申し訳ございません」

アグーはともかくツールは全然反省してやがらねえな。

「ねえねえ、ランチしよう♪」

ほらみろ。

「嫌だ。俺、ガキ嫌いだから」

向こうは何故かこちらにまとわりついてくるが、俺はガキが嫌いだ。兄弟が居ないせいかと母は首を傾げていたが。

「えー差別だ！」

どの口がそんなことを言う。

「この姿のほう人間が油断するのに」

油断させて何するつもりだ。

「…少し聞くんが。お前ら魔族の食事って…人と一緒に？」

「はい。基本的に人といっ」

「普通の食事しなくても、人から精気貰ったほうが手っ取り早いね」
「.....」

暴露をありがとう。

だんだんアグーから聞いていた『魔族の生活』が怪しくなってきたな。

まあいいけど。俺は真っ当に人間らしい食事がしたい。

「カリ様。お食事をご用意しておりますから、ご案内致します」

「人間の食えるもの？」

「もちろんです」

自信たっぷりな言い方が不安を覚える。

+++++

不安だったランチは平穩無事に終わった。

牧歌的な暮らしをしているとの言葉通り、人間の世界と同じような野菜もあれば果物もある。

肉だって…たぶん、味は問題なかった。
問題は。

「魚が無い!!」

これに尽きる。

何で魚が無い！魚は食卓には必要不可欠なメインディッシュだ。

海が無くたって、地底湖とやらがあるならそこに居るだろ！？淡水魚が泳いでるだろ！

「残念ながら、泳いでおりません」

「何故！？」

「昔から幾度か挑戦する者もありましたが、すぐに死んでしまうのです」

何てこったい。

俺は打ちひしがれた。毎朝の週間である芳しい焦げ目の魚たちが俺にさよならをしながら遠ざかってく。おお、魚たちよ・・・。

「こんなところで暮らせるか！！」

「大げさだなあ、陛下。魚ぐらいで」

一緒にランチに参加していたサリュウの発言に俺は目を剥いた。

「魚に笑う者は魚に泣く！！」

びしいっ！と指差し糾弾する。

魚こそは食の源。魚が無くて食卓が囲めるか！！！！

「肉のほうを食べやすくして良いと思うけどなあ。魚とか小骨が多くて食べにくいじゃん」

「何おうっ！そんなもの噛み碎いて身と一緒に食べてこそ本物だ！俺の言い分に何故かがアグーとサリュウが視線を逸らした。

「食べられれば何でも良いんじゃない？僕は精気が良いけど」

「トールは黙ってろ」

ガキと一緒に食事はしないと宣言した俺に、トールは一瞬で少年から青年に姿を変えた。

詐欺だろ。それ。

「と・に・か・く！俺の食卓には魚が必要不可欠なの！」

それが用意出来ないのならば、魔界になんて用は無い。魔王なんでもっての他。

実家に帰らせていただきます！だ。

《9》(後書き)

…何でこんなに魚について熱く語っているのか…(遠い目)

《10》

実家に帰ると心の中で決意した俺は、一人になった部屋で計画を立てることにした。まず、どうやってここを抜け出すかだ。地下にあるというこの場所から地上にでるための方法を探り出さなければ。

転移の魔法を使わなくても移動できる方法があるのではないだろうか？

「んぬーっ！」

「何してるの？」

「決まってるだろ、魔王の力が・・・って！？ トール！」

俺を正面から覗きこむ美形にぎよっとなった。また貴様か！

「他人の部屋に勝手に入ってくんな！！」

「えー、声はちゃんとかけたよ」

「その格好でふざけたしゃべり方をするな！」

ほとんど八つ当たり気分で俺は叫んだ。

「だってアグドメゼドみたなしゃべり方だと堅苦しいし、僕は陛下と仲良くしたいしね」

何が「ね」だ。面白がってるだけだろ、お前。

「で、何やってたの？」

「・・・お前には関係ない」

「関係あるある！だって大切な大切な僕らの魔法陛下のことだもん」

「何が大切だ。ふざけるな。俺は魔王になる気なんて無いって言っただろ」

勇者だの、魔王だの。本当にふざけた話だ。

俺はまっとうな漁師…まだ一人前扱いはしてもらえないが。

「そんなに魚料理が無いのが気に入らないの？」

「ぐ」

確信をつかれて、俺は黙った。

「魔王陛下。可愛いね？」

「は!？」

何故そこでその言葉が出てくるのか、理解不能だ。

そして、ますます顔を近づけるな。俺は幾ら美形でも男には用が無い。

「食べ物のことですんなにムキになるなんて、子供みたいだ」

怒りと羞恥で俺は、自分の顔が即座に赤くなったことに気が付いた。

怒りは、魚のことを軽視されたこと。羞恥は、子供の我が儘だと思われたこと。

「でも良いんじゃないかな」

「は？」

「魔王陛下なんて、みーんな我が儘なんだし。結局自分のやりたいことしかやらないしね。おかげで父上も勇者と相打ちなんてことになったんだし」

いやいや、それは全然『良い』ことでは無いだろう。

「ねえ、陛下」

ツールに両手で顔を固定された俺は、しぶしぶその顔を睨みつけた。

「魔族は、人間が思ってるほど残酷じゃない」

「.....」

「でも、人間が思っている以上に気促で我侘なんだよ。結局誰に何を言われたって自分がやりたいことしかしないんだから。だからね、陛下」

それはある意味、一番最悪だろ。

「逃げようなんて無駄な算段せずに、地底湖で魚飼って見たら？」

俺が黙秘していた事実をあっさりと見破り、ツールはにこりと笑った。

その笑顔が非常に腹が立った。

「え？これ……『地底湖』？」

アグーに案内されて地底湖にやってきた俺は、目の前の『地底湖』を呆然と眺めた。

肉眼では果ての見えない水面。寄せては返す小波。

「御意」

「いやいや、これ『湖』というレベルじゃ無いでしょ……」

立派に船で漁が出来る。

「マジに、ここに魚が生息していないのか？」

「はい。生物は一匹も」

明らかにヤバそうな雰囲気だな。

「えーと。何か毒性を持ってる湖とか」

「特には。普通に皆、田畑の灌漑にここに水を利用しております」

「あ、そう……」

魔族の口から田畑の灌漑とか……いや、もういいけど。

「ト्यूリクエーサから聞いたところによりますと、陛下はこの湖で魚を育てたいとのことでしたが」

「あー…育てたいわけじゃ無いんだが…こんだけ広い湖で水も綺麗そうだし…何で魚どころか生物が一匹も生息していないのか不思議

だな」

俺の言葉にアグーは顎に手を当て、考えこんでいる。

美形はどんな形をしていても様になっていて羨ましい。

「確か…3代ほど前の魔王陛下がこの湖でペットを飼っておられました」

「へえ…」

こんな広い湖で飼うペット？何だそれ。

「陛下に言われるまで私も忘れておりましたが、シーガーを飼っていたと聞いたことがあります」

「シーガー!？」

俺は目を見開いた。シーガーと言えば、海の巨大生物だ。

「今はその姿を見たという話を聞きませんから、3代前の魔王陛下が亡くなって以降、世話をするものも無く死んだのでは」

「………」

つまり、魔王が死んで世話する奴が居なくなつて…しばらくは湖に住んでた生物を餌にして生きていたんだろ。だが、ついにそれも底つきシーガーも死んだということか。

憐れな…。

《11》

さて、どうするべきか。

魚が居ない理由は判明した。こんなに住みやすそうなのに、残念だ。

「カリ様、貴方が望まれますなら地底湖に魚を放流しお育てになれば良いかと。陛下の魚であれば他の者たちも手を出さぬでしょう」
「いやいや、俺は漁師であって養殖業者では無い。魚を愛でたい訳でも無い。」

「陛下」

「あ？」

「ずずっと迫られ、俺は自然と仰け反る。何だ。」

「如何様にすれば、カリ様にこの地へ留まっていただけでしょうか？」

「如何様も何も、そもそも魔王になる気が無い。」

「陛下のお望みとあらば、その全てをこのアグドメゼド叶えてみせましょう」

「だったら俺の身を元の家に……」

「戻せ。」

「却下いたします」

「速攻で拒否しやがったな。全てって言ったくせに。」

「『陛下』のお望みとあらば、全てを叶えてみせましょう」

「そうでなければお呼びでない、と。」

「カリ様。我々には貴方が必要なのです」

「繁殖のために？」

「カリ様がどうしても嫌だと仰るならば、無理強いすることが出来る者などおりませぬ」

「……………」

何でそんなに・・・。

「アグドメゼド」

突然サリユーが空中に現われた。

「人間たちが火口に下りてくる気配があると報告があったぞ」

「面倒な：陛下、しばしお傍を離れます」

膝をつき頭を下げたアグーはそのまま、サリユーのように消えた。

「アグーは何しに行ったの？」

仕方ないのでサリユーに尋ねる。

「蠅が目の前をぶんぶん飛び回っていたら、陛下ならどうする？」

「とりあえず、追い払う」

「つまり、そういうこと」

なるほど。

「危なくないか？」

「人間が？」

やっぱりそうなのか。危ないのか。

こいつら人間が攻めてくるって聞いた時、全く退く気無さそうだったし。

「出来れば怪我人とか出さず、平和裡に収めて欲しいな。あっちはただの勘違いなんだろうし。実際に浚われた姫なんて居無いんだから」

「陛下。それを人間が信じるかが問題だぜ」

「だよなあ・・・」

普通、信じてないな。魔族の言葉なんて。

あ、そうだ。俺が行けば良いんじゃない？

「なあ、サリユー。俺もアグーが行ったところに連れてってくれ」

「行ってどうすんの？」

「話し合い。説明して誤解だって・・・」

「聞いてくれるかねえ。陛下、カリ様。自分が魔王だって自覚ある

？
」

あるわけ無い。

「あー：一回ヤツちまえば、自覚するかもよ？」

それこそ、速攻で却下させていただきます。

「なあ、カリ様。教えとくけど」

「何を」

「陛下の体から出てる真紅の気。それは魔王の証であるけど、俺らにとっては媚香そのものだ。しかもカリ様は自覚が無いもんで、放ちっぱなし。誘われてるとしか思えないんだよな」

思うな思うな。気のせいだ。

「くらくらするぜ」

ぼそりと、耳元で囁かれてぞくりと背筋が粟立った。

断じて、感じたわけでは無い。
気持ち悪かったただけだ。絶対。ここ重要。

《12》

周囲は火口に近いせいで、むあつとした空気に包まれている。

まだそれほど近づいていないのに感じられるのだから、とてもでは無いがマグマを通りぬけてこの地下まで下りてこようなんて考える酔狂さは無い。…と俺は思うのだが。

「そろそろ放せ」

「良いけど落ちるぜ？」

アグーの後を追って、サリユーと共に来たのはいいが…宙に浮いたまま抱えられている。

「下ろせ」

「足元から火つくぜ。地表も半端なく高温だからな」

「……」

俺は口を閉じた。どうしようもないって奴だ。

「…それで、人間ってのはやっぱり『姫』救出が目的なのか？」

「さあ。会ってみないことにはな」

それもそうだ。だが、それ以外の目的でこの魔界にやってくる理由が無い。

「お、今回の奴はなかなかやるな」

俺を抱えたまま火口の様子を眺めていたサリユーが口笛を吹いた。
「え？」

何が。そう思った俺の目の前でどろどろと蠢いていたマグマがその動きを止め…凍っていった。

うおーすげー……。

でも凍らされたらまずく無いか？

「どうせそうもちゃしねえよ。ほら底を見てみる」

指し示されれば、灰色の氷の根元が僅かに赤みを帯び始めている。熱が氷を溶かそうとしているのか。

自然の力って偉大だな。」

ところで先行していたアグーはどこに行ったんだ？

「何をカリ様を連れてきている」

いい加減、唐突に現われるのに慣れてきたな。

「人間たちご一行は？」

「そちらに纏めてございます」

確かに纏めて縛られていた。黒いローブを着ているのがやはり魔法使いだろうか？あとは筋肉質の見るからに戦士っぽい奴と・・・子供！？」

「おいおい子供が居るぞ」

「違う違う。あれは竜族だって。見たことない？」

あるわけ無いだろ。うーん、魔族とか人間だけじゃなくて色々なやつが居るんだな。

しかし、いくら竜族と言ったて見るからにガキを魔界に連れてくるか？

「竜族は神界との契約に縛られてるから地上に降りる時には幼体にならざるをえないんだよ」

へえ、と言ってもやはりよくわからんが。

神界？…魔界があるからには、反対もあるってことか？

「アグー、あいつらどうすんの？」

ぴくりともしないところを見ると気を失ってるみたいだが。

「今のうちに地上に送り返します」

良かった。殺すとか言われたらどうしようかと思った。

「その前に力の封印を致します」

「封印？そんなことも出来るんだ。サリユー、もう大丈夫だろ。放せ」

「はいはい」

はいは一回！

俺はサリユーから離れ、人間たちに近づく。

「封印って、力を使えなくするってこと？」

「そうです。力だけでなく記憶についても封印します。再びここに舞い戻って来られては二度手間ですから。では、少し離れていらして下さい」

「う・んっ!?」

素直に離れようとした俺は、転びそうになった。

「カリ様！」

いや、誰かが…俺の足首を掴んでいる。

「ひ、姫…」

「誰が姫だボケ!!」

あ、ヤベ。

古傷を抉られた俺は、ついついその人物の頭を殴りつけてしまった。

いやいや、俺は平和主義者。平和主義者だから。

たまたま、それが俺が言われて大嫌いな言葉ワースト3に入っていたのが運のつき。うん。

俺は悪く無い！

「目が覚めていたか」

うな垂れていた人間たち一行（竜族含む）が顔を上げる。

「…私たちをどうするつもりだ、魔族めが」

おお。初っ端から喧嘩腰だな。

「力を封印して地上へ強制送還する。それとも殺して欲しいか？」

アグーも悪役のノリだ。

…これじゃ友好的になる訳が無い。

「ちよっと、ストップ!!」

「カリ様」

「何だ貴様」

俺を貴様呼ばわりしてくれたのは、フードを被った魔法使いだ。

「ごほん。俺は漁師だ」

「『りようし』・・・？」

「いや、ほら、魚獲ったりする…まあ、一市民だ」

一行三人の疑わしい視線が一斉に向けられた。何故に。本当のこと言っただけだぞ。

「魔族が、訳のわからんことを！」

「いやいや！だから俺は魔族じゃなくて普通の人間だから！」

ほんの数時間前までは、海に仕掛けを確認しようとしていたような普通の漁師だった。

・・・過去形なのが涙出そう。

「普通の人間だと。馬鹿な。騙すのならばもっとマシな嘘をつくが良い」

これは竜族。口調がやけに偉そうなのに外見は思いつき小さな子供だから違和感ありまくりだな。

「本当だって！ほら、アグーも何とか言ってやれよ！」

「そうです。カリ様は立派な我らが魔王陛下です」

「……………」

フォローどころか、どん底に突き落とされた気分です。

《13》

この向けられる冷たい視線ときたら。俺は本当のことしか言っていないっつーの！

「いや、話に聞いたことがある」

あ、俺に頭をしばかれた男だ。

無駄にいい筋肉つけやがって。…俺なんか幾ら励んでもつかないのに。

いやいや、まだまだこれからこれから！発展途中なんだ。

「その時は馬鹿げた話だと思っていたが…」

「何のことだ？」

魔法使いが訝しげに剣士に尋ねる。

「陛下の妹姫が魔族に浚われた話は知っているだろう？」

「ああ」

「美しく優しい姫…その姫を助け出すために勇者殿は魔王を倒すために剣を取った」

恐らく俺の母親のことを話しているのだろう。

しかし、勇者が魔王と戦うために剣を取った理由が俺の母親？…マジで？

報われないにもほどがあるだろ、それ。

「だが、一つ妙な噂もあったのだ。姫は浚われたのではなく、魔王に魅され自らその手を取ったと」

魔王じゃなくて、魔王の息子だけどな。

「では、そいつは魔王の息子だと？」

正しくは魔王の息子の息子、らしい。当人たちにはつきり話を聞いた訳では無いのでこっちだって未だに半信半疑。はあ・・・ホントに、俺は魔王の息子の息子なのか？

竜族が徐に立ち上がり、縛っていたものをぶちぎった。おお。

「貴様、仮にも勇者の裔でありながら、魔族に組致すか」

「俺にとって魔族も勇者もどうでもいい。だって漁師だからな」

「……」

何だ、何だ。その困った子を見るような視線は！！

アグーとサリユー、背後でこっそり溜息つくな！

「ま、ともかくだな！ここには囚われの姫なんてのは居無いから！
強制拉致された漁師は居るけどな。」

「大人しく地上に帰ったほうが良いと思うぞ。アグー一人に三人だ
って敵わないんだから、無傷で返してやろうって好意を無碍にする
もんじゃないと思うよ」

心優しき俺は、三人に穏やかに言い聞かせる。これぞ大人の対応。
あわよくば、どさくさに紛れて俺も返してもらえないかなあなん
て考えてみたりもする。当然。

「その話が本当ならば……」

子供（竜族）が俺に歩み寄る。

「カリ様！」

え、何。

「それこそ、我はただでは帰れぬな」

一瞬の閃光。

ぶわっと体全体を何かに覆われる感触がして、瞬間瞑った目を開
けるとさらさらと銀の雨が目の前に降り注いだ。……いや、雨じゃな
い。糸？……いや。

俺はその糸を辿り……誰？

また規格外な美形に行き当たった。……本当にな。美形率高すぎる
だろ。

だが幾ら美形でも男に用は無い。潤いも無い。

しかも何で俺が抱きしめられてるんだ。人質？

「あんた、誰？」

「蒼瑠。^{そつりゅう}天が竜の一族。」

その紹介は俺には全く意味不明だが：想像するに、先ほどの子供だった竜族なのだろう。

何で突然に大人？

「魔王の息子であると言うのであれば、当然に姫の子でもあろう？」
まあ。そういうことにもなる。

「陛下より離れろ。悪食なる竜めが」

アグーの言葉と共に頬の横を何かが通りすぎる感触がし、竜族が俺から離れた。

そこをすかさず、サリユーにキャッチされる。

・・・キャッチ&リリース、そして再キャッチ。されるがままの俺・・・。

「油断しちゃ駄目だぜ。竜族なんて碌なもんじゃねえからな」
魔族に碌なものじゃない評定される竜族って。

え。そうなの？人間側についてるから魔族に嫌われているのか？

「人にとっても碌なもんじゃないな。竜族が人に力を貸すのは、見返りがあるからだぜ」

「見返り？」

「そ。竜族はな、人間から巫女という名の贄を受け取るのさ」

うーん。俺は額に指を当て、考えた。

ギブアンドテイク、てことだよな。それ。無償奉仕よりわかりやすくて良いんじゃない？

ま、その巫女が同意してたらだけど。

「私の巫女は、そなたの母であつた人だ」

うわー。そういう繋がりですか。

でも俺の母親は、素直に贄なんてしそうな性格じゃない。

ん？つまり・・・それで親父と逃げた…のか？そういうことなのか！？

親父もお袋もお互いに死活問題だったんだなあ…ああ、想像できる。酒場で出会ってお互いの事情を語り合い、意気投合。

『丁度良いからこのまま逃げないか？』

『そうね。それも面白いかしら？』

フフ。ククク。

絶対そうだ。間違いない。子供の俺が言うんだから！

《14》

だが、俺が巫女予定だった母親の子供だからってどんな関係があるんだ？

「逃げた巫女については恨んだことだが、お前という存在を残した
ことについては褒めても良い」

そんなものは1Gの足しにもなら無いから要らないと母なら言っ
ただろう。

「カリ様、出んなよ」

「ういっす」

意味はわからないが、あの竜族はやバイ気がする。

うねうねと足元まで届いている水色の髪は、美形でなければむさ
苦しいと評しただろう…それがマントのように広がっている。ホラ
ーだろ。

子供のままのほうがまだ可愛かったぞ。

「巫女の裏切りを子で贖わせてやろうと言うのだ。我は心が広い」
自分で言うな。

「そっちが勝手に決めたことで俺は知らん。巻き込むな」

「そうはいかぬ。これは我ら竜族と人との契約。守られねばならぬ」

「俺はそんなものした覚えねえもん」

しっしっ。お呼びじゃねえよ！

アグーとサリューの背中に隠れながら俺は強気で言い放つ。
だいたい巫女って何だ？

「カリ様、巫女と呼ばれる者は生贄。竜の餌となる者」

「…それは文字通りの意味で？」

アグーは頷いた。…それは母親も逃げ出すな。

「何も知らぬ魔族が口を出すな。我らにとって巫女とは花嫁。我が子を残す者だ」

またそのパターンか。

でもそれってやっぱり女じゃないと駄目じゃん？

俺、男。セーフ！！

そんな俺の内心の言葉が聞こえたように竜族の…えーと蒼瑠だけか…は、にやりと笑った。

「人であつたならば、男になど用は無い」

うん、だろ。だからやっぱり俺は…

「だが、魔族であるならば別だ。魔族は我らと同じ卵生、お前が魔王というのならば益々重畳。我が子を産ますに問題は無かろう」

ありまくりです。

「断固として拒否する！俺は人間で男で、無理！！」

何が悲しくて魔族だけじゃなく、竜族にまで狙われなければならないんだ。

今更だが、俺って相当不幸じゃないか？

「カリ様は我らが魔王陛下。竜族如きが陛下に近寄ることさえ厭わしい！」

いいぞ！もっと言ってやれ！！…魔王になるなんて言って無いけどな！

「幼体であればこそ不覚をとったが、この姿ならば戦うに吝かでない。…我が唯一の花嫁を迎えるためとあらば、天の誓約も許されるというものよ」

ばちばちばちいいっ！とアグーと蒼瑠の間で紫電が閃いた。

睨みあつただけでそれって、闘いだしたらどうなるんだ？…避難したほうがよくないか？

「サリユー」

逃げようぜ、と提案しようとした俺は…滅茶苦茶好戦的な表情を

浮かべているサリユーに口を閉じた。明らかにやる気だな、お前。

「カリ様。結界張るからそこから出ないようにな」

おう。俺は自ら危険に飛び込むような馬鹿な真似はしない。人生、安全穏やかなのが一番。

今ならしみじみそう思うぜ。

「ところであっちの二人は？」

人間二人は竜族と魔族のやりとりの間、放置プレイだ。そのままで良いのか？

「勝手に逃げるなり地上に戻るなりするだろ。ここに要れば魔力に巻き込まれるだろうし、魔界に居ればどのみち魔の気に蝕まれて人では無くなるからな」

進退窮まってるな。可哀相に、本当か嘘かもわからない『姫』を探しにきて竜族の魔族の戦いに巻き込まれようとは。相当幸薄いんだろうな。

俺も他人のこと言えなくて悲しいけどな！

《15》

「派手にやってるね」

今までどこに行っていたのか、ツールが再びガキの姿で現われた。目の前ではアグーとサリユーが蒼瑠とドンパチ始めている。赤い炎やら巨大な氷やら吹きすさぶ突風やら：結界の中に居る俺には被害は欠片も無いが、その外は大変なことになっている。

誰が元に戻すんだ？

「祭りって思うには派手すぎだよな」

「陛下は恐いって思わないの？」

「まあ、俺に実害がありそうなら恐いとも思っただろうけど：」

透明な壁を一つ隔てた向こう側の世界の出来事だ。

恐いというのなら親父と母親との夫婦喧嘩のほうが何倍も恐かった。あの二人は周囲のことなどお構いなく、自分たちが精魂尽き果てるまでやり合っていた。

その時点で、今考えれば普通ではない二人だったんだろう。気づけよ、俺。

暇なので自分で突っ込んでみる。

「頼もしいね、陛下」

「ばーか。で、お前は何なの？」

「陛下が魚が恋しいって泣くから」

「泣いてねえよ」

「地上から魚を捕獲して湖に放しておいたよ」

その言葉を聞いた瞬間、俺の目は輝いていたことだろう。

ガキは嫌いだなんて言って悪かった！お前はいい奴だ！！

しかし、その後暫く湖に行き：共食いやら環境が合わないやらで

大量に死滅した魚たちにツールに任せるんじゃないかと後悔することになるのだが。

「ところであいつら何しているの？」

「うーん、不毛な戦い。竜族の馬鹿が俺を巫女とやらにしたいらしい。それにキレたアグーと調子に乗ったサリユー、という図式」

「ふーん、陛下を巫女にねえ・・・馬鹿な竜族の考えそうなことだね」

竜族って馬鹿なのか？かなり偉そうに人間見下したようなしゃべり方だったぞ。

「自分たちだって魔獣の一種にしか過ぎないくせに、天と繋がりがあるってことで勘違いしてるんだよ。騙されてるだけなのに、本当馬鹿だよね」

騙されてるだけって・・・そうなのか？

「天なんてあてにしたって馬鹿みるだけ。だいたい本当に下の世界を気にしている連中なら僕たち魔族のことを見逃すと思う？」

ごもつとも。

「そんなことより、ここで眺めてるだけなら遊びに行こうよ。陛下が治めることになる魔界を見せてあげる」

治める気は全く無いが、観光気分でみてまわるのも良いかもしれない。せっかくの機会だし、地上に戻れば二度と戻ってくることも無いだろうし。

よしとことん遊び尽くそう！

「・・・で。どこ？」

「僕のお城」

「・・・帰る」

俺でもわかる。今、俺は非常にヤバイシチュエーションに居る！
間違いない！

俺の馬鹿！何でこんな奴の言葉を信じたんだ！

「待って待って、ここもちゃんと観光名所だから」

こっちに來てよと腕を引かれて連れて行かれたのは、ぐると螺旋を描いた階段の先。細長く切り取られた出口から明かりが漏れる。
「ちよつと目を瞑って」

「おう」

そして、もう三歩。

「いいよ。目を開けても」

恐る恐る目を開けた俺は、おおっと口には出さず感動した。

眼下に広がる緑なす平野、そして家々。輝く湖。こうして上から眺めるなんてことは初体験だ。

すげー。

「僕の城は高台にあるからね。眺望は抜群なんだ」

「ほう」

「陛下が気に入ったらいつでも遊びに來ていいよ。もちろん住んでくれても良いけど」

謹んでお断り申し上げます。

「あの湖って、例の地底湖？」

「そう。陛下の城からはちよつと見えないけど、僕の城からならこの通り」

何やら自慢そうなので、よしよしと頭を撫でてやった。

「陛下…」

褒めてやったのに不満そうな顔で見上げてくる。何故。

「あのね、僕見た目通りの子供じゃ無いんだけど」

「そうだっけ」

だがやってることは、かなりお子様だぞ。お前。

何だか調子狂っちゃうなあ、とツールお坊ちゃまは呟いている。

「ふふ、陛下は本当に性格はルビリクラッサによく似てる」

「る、ルビ・・・？」

「君のお父さん」

そうか親父の本名はそんな長ったらしい名前だったのか。周囲の人間や母さんには『リク』と呼ばれていたが、大幅に省略されていたらしい。

「時代の魔王様ってことで周囲が大夫甘やかしちゃったからね、家出しちゃった時にも僕たちはすぐに帰ってくるもんだと思っていたんだよ。それが」

二度と帰って来ない、なんてね…と外を眺めるツールの横顔が妙に寂しげだった。

結構、親父は可愛がられていたのか。可愛がられている親父なんて、気持ち悪すぎて想像すらしたくないが。

「帰ってきたら百年ぐらいぐるぐる巻きで閉じ込めてお仕置きしようと思ってたのに」

おい。

「やっぱり夜這いしたのが良く無かったのかな」

間違いなくそうだろうな。

《16》

親父の苦勞も偲ばれるが、よくもあの親父を夜這おうと思ったな。俺の親父の印象ときたら、無精髭をぼうぼうに生やして、でかい図体を母さんに追い掛け回されている…というものだ。あまりいうか、かなり情けない。

しかし夫婦仲は良かった…ような気はする。

「顔はもちろん陛下のほうが可愛いよ」

そんな評価はいらん。

「なあ、ぶっちゃけ。俺のこと殺そうと思ってたんだよね？」

「うん」

あつさり肯定するなよ。少しは申し訳無さそうにしろ。

「やっぱり俺が邪魔だったから？」

それならそれで、俺が地上に戻るためにツールなら協力してくれる可能性がある。

「違うよ。陛下を見たら引き返せなくなっちゃうだろうなって思ってたから」

「引き返せない??」

何が。どこに？

「僕はね、前魔王陛下の長子なんだよ。一番最初に生まれた子なわけだ」

「それが？」

どうかしたのか。

「アグドメゼドよりも誰よりも僕は長く生きている。ずっと独りで僕の魔王が現われるまで、ずっと…ルビリクラッサが生まれた時は本当に嬉しかった」

な、何か重くないか？ 空気が…俺、苦手なんだってそういうの。

「でも、居なくなった。何処にも居ない」

ずっと視界が黒くなり、冷気が肌を撫でた。
鳥肌が立つ。

「トール！」

何故か叫ばなくてはならないと感じた。

トールの金の瞳が遠くを見るように視点が定まらず揺らいでいる。

「…ん」

俺の腰ぐらいまでしかない小さな体の腕を掴んだ。腕は細く、冷たい。

「ああ、そうだね」

だから一人で納得するな。俺にわかるように話せ！

「居なくなったけど、陛下はやっぱり戻ってきた。もう一度その存在が失われたら僕は狂ってしまうだろうな。…だから狂う前に殺そうと思ったんだ」

極端過ぎるわ！

うーん、今まで会った魔族の中で一番俺のことどうでも良さそうだったトールが一番のダークホースだったって奴か。ますます今の状況が不味く無いか？

「陛下。・・・カリ様」

初めてトールが俺の名を呼んで、ぞわりと背筋が粟だった。な、何だ！？

「ルビリクラッサのように、逃がさないからね」
宣言されちまった！

はぁー…俺はますますドツボに嵌まって行ってるな。うん。

「…というわけで、カリ様にはこれをプレゼントしちゃう！」

何が「というわけ」なのか。ツールがずっと宙から取り出したその明らかに胡散臭い腕輪は何なのか。

一見シンプルな金の輪だが…俺の勘が警告している。ヤバイ。ヤバイ。それは！と。

「いない」

「大丈夫。カリ様が本当に魔王なら一害にもならないから」

「俺、魔王じゃないから一害にも百害にもなると思われるので謹んでお断りします」

「駄目、でーす」

うわっお前っツール！何やってんの！！

慌てる俺の手に、眼にも止まらぬ速さで金の腕輪を通す。

うわー呪いの腕輪だったらどうするよ、俺・・・

「いい感じ♪」

「…な訳あるか！！外せ！」

「ダメー。それはカリ様の身を守るものでもあるからね」
なぬ。

俺は必死で外そうとしていた手を止めた。

「まだ魔王の能力に目覚めていないカリ様には、護身具でもあるからね。概ね平和な魔界だけど危険が無いわけじゃないから。それがあれば僕たちにはカリ様がどこに居るのかすぐにわかるようになって…小さい子につける迷子札みたいなものかな？」

この年で迷子札！？

………ああ、俺は無事に帰れるん

だ
ろ
う
か
・
・
・
・
。

《17》

「残念だったね、陛下」

くそ、こいつわかってやがったな。

でも俺は負けない。諦めないからな！！

「僕としては陛下はこのまま力に目覚めなくても良いかなって思わないでも無いんだけど…」

「目覚めるも何もそんなものは無い」

「流されやすそうなのに頑固だね。ここまできたらいい加減諦めたら良いのに」

冗談！ここまで諦められないから諦めないのだ。

「でも、ホントにここままだと危ないよ」

「何が」

どう危ないってのか。先ほどの人間その他ご一行との遭遇以外に特に危険な目にはあっていない。

想像していたような恐ろしい魔獣なんてのも見ていないし、極悪非道だと世間で評判らしい魔族も強引さにはムカつくが、酷いことをされたわけじゃない。

何が危ないのか俺には全くわからない。

「身が」

「は？」

「身の危険。例えばカリ様が一人で外をふらふら歩いてたでしょう」
両親も亡くなり、奥さんも居無いから基本一人でふらふらしてるな。

「10分後…いや、五分後には攫われて喰われてるよ」

「・・・誰に」

「もちろん、僕の兄弟たちに」

無邪気そうな顔で笑いながら言うんじゃねえっ！！

「兄弟って：アグーたちだけじゃ無いのか？」

「カリ様、前魔王の年は知ってる？」

「：1万は超えてるって聞いた気がする」

「そう。それだけ永く生きてるわけ。そして人間みたいに老いるって概念は魔族には無いんだよ」

どっかの貴族が喜びそうな話だな。

「いつだって子供を産める。その状態でそれだけ永く生きてて子供が僕たちだけな訳ある？」

「・・・無い、デスネ」

人間だって百年も生きないくせに、産もうと思えば十人は産める。俺の近所でも評判のおばさんの家は十五人兄弟だ。：まさかそこまで頻繁に子供を作るとは思えないが、一年に一人でも：一万人。ありえん。在り得なさ過ぎる！！！！

「お前ら兄弟、実際何人居るの！？」

俺の傍にそいつらが寄って集って：想像しただけで寒気がするぜ・

「んー。五百年ぐらい前に大きな兄弟喧嘩があって減ったから：」

ちよつと待て。何だその兄弟喧嘩で数が減るってのは・・・

「百人居るか居無いか、てところかな」

それでも十分多いがな。：何故兄弟が減ったのかは詳しく聞きたくない。絶対に。

「普通なら選ぶのは魔王陛下だけど、今のカリ様だったら好き放題やり放題。何しろ抵抗する力が無いんだから。美味しい餌が何の罠も仕掛けも無い場所にさあ食べろって置いてあって手を出さない馬鹿が居る？僕だったら見つけた瞬間に食べるね」

嫌だーっ！！

俺は予想以上に酷い俺の立場に頭を抱えた。何だそれ。嫌過ぎる。

「何で今そうされないかって言うと、アグドメゼドや僕が傍に居るからだよ」

「：何でお前らが傍に居ると襲われないんだ」

「ちょっと考えればわかるでしょ？兄弟の中でも1，2を争う力持ちだから牽制してるんだよ、カリ様は僕たちが唾つけてますよ〜って」

感謝してくれて良いよ、と朗らかに笑うツールに疲労感が襲う。感謝するどころかこの想像を絶する不幸な立場に問答無用で据えられたことに憤りさえ感じる。

何だそれ。何だそれ！

「俺は魔王じゃない！カリだ！ただの人間の漁師だから！！」

「駄々こねない」

「駄々じゃねえよ！」

見るからにガキに何故駄々と言われなければならない。

「駄々だよ。判ってるくせに。カリ様。『カリ』はホントの名前じゃ無いでしょ？」

「嘘じゃない」

「でも全部じゃない」

「・・・」

「ルビリクラッサがそんな短い名を子につけるわけない」
「知るか」

俺は『カリ』だ。それ以外の何でも無い。

「トューリユクエーサ。やりすぎると嫌われるぞ」

「ヴァミリユム」

紅の美女はテラスで艶やかに不敵に笑っていた。

「ヴァミリュウム」

楽しそうだった表情を、トールはすっと隠した。
仲が悪いのか？

「陛下。あまりトゥーリクエーサの申すことを本気になさるな」

「僕は嘘は言っていないよ」

心外だとばかりにトールは腕を組んでヴァムを睨んだ。ヴァムはそんなトールに笑う。

「嘘は言わずとも、惑わせはする」

「お前に言われたくないよ。鮮血鬼」

だからその物騒な二つ名は何なんだ！？アグーも殺戮卿とか呼ばれてたよな？

「陛下が凶太子に連れ去れたのを見たとき部下が知らせたので救いに参りました」

ヴァムはトールを無視して、俺に手を差し出した。ん？救いに？俺は誘拐されたの…か？

「愚かな部下をもつて哀れだね。カリ様は進んで僕と一緒に来てくれただよ」

ね、とばかりに顔を向けられ…まあ無理やりには無いな、一応…と頷いておく。

「陛下はお優しい。貴様の姿に油断されたのであろう。…陛下、トゥーリクエーサは陛下を殺そうと画策していた者。油断めされるな」

んー、油断どころ言う前に警戒しても無力な俺には無駄だな。疲れるだけだ。

「確かにツールが俺を殺す気だったって話は聞いた。今はその気は無いらしいけど…」

それ以上に俺にとっては物騒な考えを持っている。

逃がさない…そう宣言したツールは、不気味だった。絶対にヤバイ。俺の本能が訴えている！

「そう、僕にカリ様を亡き者にしようなんて考えは欠片も残ってない」

「どうだか……。陛下、殺戮卿がお姿を探しておりますれば城へお戻りを」

「アグーが？…騒動は片付いたの？」

かなり派手に竜族とやりあってたみたいだけど。

「魔界は我らのホームグラウンド。竜族などに遅れはとりませぬ」
俺の縄張りで好き勝手はさせねえぜ！…てことだな。でもそれなら何でアグーが迎えに来ないんだ？

「ここはトゥーリクエーサが治領。殺戮卿は協定により入れませぬ」

「でもヴァムは？」

「私は螺旋の楔より弾かれた者。傍観者にしかねませぬゆえ、どの地にも足を踏み入ることが出きるのです」

俺は首を傾げた。意味わからん。

顔に出ていた俺に疑問に、ヴァムは慈しむように笑った。

「今はまだおわかりにならぬとも。こうして陛下に見えた僥倖、何物にも変えがたし」

「全く意味わからんけど……。まあ、帰るよ」

そろそろ腹減ったし。

…今度は魚が食卓に乗ってるかなあ……。無理だろうなあ。

「お帰りなさいませ、カリ様」

「ただいま」

ここを自宅にするつもりは全然無いけどな！！挨拶は基本だ。母さんに死ぬほど叩き込まれた。

「竜族は尻尾を巻いて逃げ帰りましたので、どうぞご安心下さい」
俺の頭の中にでかい蜥蜴が尾をぐるりと巻いた光景が浮かんだ。

俺の貧困な想像力ではこの程度だ。だって竜なんて見たことねえもん。

「腹減ったんだけど」

というわけで、俺は生理的欲求を口にした。

「はい。料理人にはすでに用意を指示しております」

「上げ膳据え膳だなあ…」

この生活に慣れると元の生活に戻れない気がする。

アグーに連れられてやってきた部屋はランチをとったのは別の部屋だった。

一回りほど広くて、天井から『これでもか！！』と言わんばかりの煌煌しい巨大シャンデリアが存在を主張している。この城、いったいどれだけ部屋があるんだ？

迷ったら二度と出られないような気がするのは気のせいか……。

「どうぞこちらへ」

誘導された椅子へ腰掛ける。

貴族の食事作法なんて俺は知らないんだが…並べられた数々の食器の使い方がわからない。

「好きなものをお使いいただければ幸いです。ここではカリ様がルールですから」

「いやあそれはちょっと…」

俺がルールって…迂闊に何も出来ないような…。

戸惑う俺の目の前にスープが運ばれてきた。掬うスプーンは一種類。これを使えば良いだろう。

「うまいっ！」

「御口にaimまして何よりでございます」

材料は何かはわからないが、何かを濾したようなざらざらした食感が残り、それが液体だけのものとは違い口の中にいつまでも残り続ける。より美味しさを味わえる。

スープが薄く緑色をしている…野菜だろうか。

「焼きたてのパンもございますから、好きなだけお召し上がり下さい」

「ありがと…そういえばさ、ツールに聞いたんだけど、アグーたちの兄弟って…たくさん居るのか？」

「たくさん、というほどでは無いかと思いますが…百人程度は」
十分多いって。

「全ての者が魔界に残っているわけではありませんから…カリ様がお会いになりたいと仰られるならば場を設けますが…」

如何でしょうか？と聞かれて俺は勢いよく首を横に振った。

アグーとツールとサリユーと…もうそれだけでいっぱいだ。もう要らない。

「左様でございますか。ですが、あと5人ほどはカリ様にご挨拶申し上げますねなりませんのでお許し下さい」

何の挨拶。

…そういうの無しにして、地上に帰りたいなあ
・
・
・

《19》

さて、漸く就寝の時間がやってきた。長い1日だった・・・いつそのこと夢落ちとかにならないかなあ・・・無理だな。

「あれ、カリ様もう寝んの？」

おやすみーと居間から寝室に向かおとする俺にサリユーが待ったを掛けた。時刻は10時。・・・何か文句ある？漁師は早寝早起きなんだよ！

色々有りすぎて頭ぼうっとするし。精神的疲労の何物でもないと思われる。

「旨い酒あるんだけど」

「飲む」

くれ、と俺は手を差し出した。瓶ごとベッドに連れ込もうという算段だ。底なしのこいつらに付き合ってられんしな。

サリユーの手から酒を奪い取ると俺はさっさと寝室に入った。

酒は嫌いじゃない。滅多に飲めないような良いお酒は嫌いどころじゃなく、大好きだ。

ただ、あまり俺が強くないというだけの話で・・・

どうやら俺はナイトキャップを楽しみながら、寝てしまっていたらしい。

「うーん…」

寝苦しさのあまり半分意識が覚醒した。

暑苦しいというより重い。寝返りを打とうにも何かに拘束されているかのように身じろぎできない。

え？・・・金縛り！？

いやいやいやホラーとか勘弁してくれ。

恐る恐る俺の上に『ある』らしい『何か』を見るために目を開けた。

「ひっ」

何か巨大な黒い物体が！！俺の上に乗ってるんですけど！！！？！！！！

『魔王陛下』

声無き声が俺に届く。黒い物体がしゃべったのか！？

『僕は陛下の従獣。虚琥狼。見知りあれ』

見知るよりも何よりも先に俺の上から退け！！

黒い大きな物体は、俺の心の叫びが聞こえたのかのそりとした動きで広い寝台の隣に寝そべった。

最初からそうしろ。

「・・・で、何なの？」

人の安眠を妨害しやがって。

幾ら目が赤くて、鋭い牙が口から生えていたって…安眠妨害の理由にはならんからな！！

『僕は陛下の傍に侍る者。騒ぎが起こっておりましてゆえ離れておりましたが、通常ならば殺戮卿よりも傍にあるべきもの』

簡単に言えば、『アグーより俺のほうが凄いだぜ!』と言いたいのか。

言いたいだろうな…その『褒めて!』と言わんばかりの赤い眼は。

だが、繰り返して言う。俺は眠い。

「あー・・・そう」

『陛下!』

本当に何なんだろうな、この仕打ち。俺は寝たいだけなのに。

「わかったわかった…よしよし」

犬…というには大きすぎる物体を俺は…半分寝ぼけていたのもあったんだろう…よしよしと手で撫で付けた。近所の犬を扱うようにこうするとタローはいつも・・・

はっはっはっはっ!はっ!はっ!

え、ヤバイ!? そうだよっ! 全然あいつ落ち着いてなかった! それどころ興奮しまくって俺に飛び掛ってきてたじゃないか!?

懐かしいというには獰猛すぎる鼻息が、顔にかかる。

ちよっと待て! お前は知的生物だろ! タローと同じ反応をしてどうする!?

タローの数十倍はあろうかという体格でかかってこられたら、受け止めることなんて出きるわけが無い。

「重っ!・・・ちよっ乗るな!」

再び俺の上に押し掛かってこようとする虚琥狼の頭をべしべし容赦なく叩く。

『陛下。陛下。陛下はとても良い匂いがする』

だからって首元をくくん嗅ぐんじゃねえよっ!!

どうにか悪戦苦闘して虚琥狼とやらを引き離した俺の眠気は遠い彼方に消え去っていた。

「…黒板だか、コックローチだか知らんが」

『虚琥狼だ。陛下』

「突然人に断りも無く部屋に侵入して、あまつさえ安眠を妨害するなぞ万死に値する!!」

びしいっ!俺は指を突きつけた。

「お前は床!伏せ!待て!!」

流れるような俺の指示に虚琥狼は素直に従った。

おう。躡けは行き届いているじゃないか。

「…じゃ、お休み」

『陛下!』

だから何なの!

『陛下の御名を儂は伺っておりますぬ!!』

「カリ。それだけ」

それ以上でも以下でもない。ご理解いただけましたかってんだ。

「じゃ、ホントにおやすみ!」

これ以上邪魔されないようにと、シーツを頭から被った。

『カリ様、
・
・
・
・
カリ様』

「ん
・
・
・
んあ？」

ゆさゆさと揺すぶられる感覚は馴染み無い。母親のお越し方ひとつと鬼気迫っている……どんな風かはトラウマになりつつあるのでしやべらないが。

『お目覚め下され。お早うございます』

ごしごし、と目をこすりながら：寝起きでぼうつとする頭を抱えた俺の目の前に：至近距離に顔があった。

ぬわ ああ あつ！？！？！？！！！！

《20》

あまりに驚き過ぎて、条件反射で頭突きした。

・・・痛えっ！！本気で涙が出る・・・再び失神という名の眠りにつきそうだった：

「陛下！？」

俺が悶絶している前で、正体不明の相手は全く平気そうにのぞきこんでくる。

ダメージは俺だけか！？何て理不尽。

「ああっ！額が赤くなっておられる！！疾く治癒せねば！！」

いや放つとけばそのうち治るって・・・てえっ！？待てっ待て！！！！
だんだん何故か近づいてくる顔に俺は必死で待ったを掛けた。

「何をなさる！」

「それはこっちの台詞だっ！！何するつもりだ！」

「治癒を・・・ご安心下され。舐めればすぐに治ります」

「な・・・舐め！？」

何を誰がどこを！？！？

「いらんっいらん！！放つとけば治るから！！」

「しかし！」

「いいからっ！！」

うう・・・何故朝からこんな疲れるやりとりしてるんだ・・・

「・・・ところで、あんた誰？」

俺の問いかけに男は傷ついたように顔を顰めた。

「お忘れか！？」

お忘れも何も、初対面です。

「昨夜名乗り申し上げた。虚琥狼にございます」

……。俺は記憶を遡る。

昨夜……ああ！そう言えば、何か不気味な黒い物体がそんな名前を言っていた。

「黒い塊」

「黒い塊ではございませぬ！儂は陛下の従獣、虚琥狼こくろう、太古より魔王陛下のみに従う獣にございます」

俺は額を押さえた。だって、どう見ても目の前に居るのは獣じゃない。

俺と同じくらいの年の、ちょっと小煩そうな兄ちゃんだ。

「この姿は陛下の傍に仕えるための仮の姿。本来の姿は昨夜お会いしたものの」

「へえ」

だからって俺の安眠妨害した理由には全くならないけどな。

色々非常識すぎて常識を説くのに疲れてきたけど。：これは一般的に『流されている』というのでは無かろうか。良くねえな。

「おはようございます、陛下」

「おはよう」

朝食の場所は昨日とはまた別の場所だった。：俺、絶対一人じゃ

行動出来ないだろ。

アグーは俺に近づき腰を折って一礼した後、背後に居た虚琥狼にちらりと視線を走らせる。

「儂が不在の間、面倒を掛けた。殺戮卿」

「何の。カリ様のお世話が喜びでありこそすれ、面倒など。出来るならばこのまま虚琥狼には引退していただいて良かったほど」

「儂が引退などと。何処の馬鹿が勘違いしたか知らぬが有り得ぬ。陛下在る限り、儂は従うが本性」

うん。二人の仲があまり良くないってことは良くわかった。

「アグー、それからロウ。俺は腹減ったんだけど」

「気が回らず失礼致しました。どうぞこちらへ」

そつなく誘導するアグーに対してロウ：虚琥狼は何故か固まっていた。

「ロウ？」

「：それは、儂のことですか？」

「うん。虚琥狼って何か呼びにくいじゃん。ロウでいいだろ？」

気に入らなかったのか？：今更考えなおすのも面倒くさいな。

「ああ！陛下！：儂に陛下より名を賜る日が来ようとは！！」

え、何。何でそんなに感激してんの？タダ単に呼びやすくしただけで深い意味は無いぞ。

「カリ様。少しずつ魔界の『常識』を識っていたくのが良いかもしれないですね」

疑問符を飛ばす俺に、アグーが深刻な表情で呟く。

「・・・・・・」

正直知りたいとは欠片も思わない。魔界に骨を埋める気はさらさら無い。

だが、このままの状態ではますます自分の首を絞める事態になりかねないような・・・

少し恨めしそうにアグーを見上げたが、気づいているのかいないのか：

元凶の魔族アグドメゼド。だが、俺は彼を憎らしいとは思って居無い。腹立つな、とは思っているけれど。だってここに来てからの魔族たちの反応を見る限り、アグーが来なかったら遅かれ早かれ別の誰かが来たんだろう。王宮からの使いもそうだったように。

「どうぞこちらに、カリ様」

「ん」

生返事をして、俺は椅子に座り…目の前にあった存在に目を見開いた。

こ、これは！！！！

信じられない思いでアグーを見上げると、綺麗な笑顔を浮かべてこくりと頷いた。

さ　か　な　だ　！！！！！！

「朝一番に人間界にて獲って参りました。御口にあえばよろしいのですが」

おお！すげーっ！！

紛うことなき、焼き魚。

くそーっ！会いたかったぜちくしょうっ！！

《21》

「お喜びいただけ何よりです」

毎日見ていた魚とこれほど感動的な再会を果たそうとは思ってもみなかった。

「陛下、魚がそれほどにお好きであれば儂が毎日獲りに参りますぞ
いやいや。それでは本末転倒だ。

俺は魚が食べたいだけでなく、漁をしたいのだ。

「ところでカリ様。人界にて面白い話を耳に致しましたのでお耳に
「面白い話？」

何だ？

「勇者がたち、魔王討伐に乗り出すとのことです
あれ？

「勇者？」

んん？でも：確か、俺しか勇者の血筋が残ってないとか言っ
て無かったか？

「そのような所以でそうだったかは定かではありませんが、カリ
様もお心を決められて下さい」

「え」

いやちよつと待て。何で俺が心を決めるとか・・・え！？

討伐される魔王って・・・俺！？

今更ながらに愕然となった。1, 2日、うだうだしているうちに
魔王確定か！？

「ご心配無く。カリ様の御身には指一本たりとも触れさせません」

「儂ら魔族にとり、人など塵芥と同じ。恐るるに足りませぬ」

俺はあくまで平和的に解決したいのですが・・・？

全面对決確定っぽい二人の態度に顔が引き攣る。

牧歌的に生きてきたとかいう話は怎么样了？

「：話し合いで解決しようって方法は？」

「カリ様のお優しい心はわかりますが、無理でしょう。人は人以外のものを排除し、理解しようとはしませんから。そもそも我が本気で人を廃しようとするならば、地上もすでに我らがものとしております。それを人は理解しない」

確かにそれはなあ：ちよつとだけ見ても人と魔族の力の差は歴然だ。

魔族がその気なら人間の世界なんてあつという間に蹂躪されるだろう。

「いっそのこと、陛下が支配されては如何か？」

「はいいっ！？」

ロウの物騒な発言に俺は目を剥いた。

「それが良い！陛下のお力で人の世界を支配し、足元に平伏せ・・・」

「却下！：そんな疲れることしたくない。支配者になんてなりたくない。平和に暮らしたい。漁師したい」

普通の人間で居たい。

俺の望みは贅沢か？

「虚琥狼、貴様はカリ様の御心を全く解しておらぬな。そして、カリ様。貴方は魔王陛下。もう引き返すことは出来ないのです」

「お前が・・・っ」

お前がそれを言うのか、アグー。

平和な世界から俺を引き離れた張本人。：わかっている。お前がやらなかったら別の誰かがやったのだ。それでも。

「貴様が死ねば魔族は滅びる。はっきりとそう言ってやったらどうだ」

あ、新顔だ。

今までの奴らは内心でどう思っただろうと俺を『魔王』として敬っていた格好を崩さなかったが、こちらは態度も言動もふてぶてしいに尽きる。

ちなみに格好も軍人仕様で威圧感たっぷりだ。

「ジキエインツラ」

また、舌噛みそうな名前だな。

「陛下の御膳で名乗りもせぬとは無礼であろう」

ロウが相手の視界を遮るように俺の前に立った。

「そりゃどうも。俺はジキエインツラだ。魔軍の総司令官だっつてもわからんだろうが」

確かにわからない。魔軍なんてものがあつたのか。

「・・・ジーク」

ロウの傍らから顔を出した俺に、肉食獣のような笑みを浮かべる。

「何だ、無知なる魔王」

齒に衣着せない物言いは、アグーたちのものより俺には馴染み深い。

むしろ回りくどくなくてわかりやすい。それでも俺が魔王であることは否定しないんだな。

「どういう意味？」

「どういう、とは。よほどの馬鹿で無ければわかるだろう」

はつきりと馬鹿にされて、むっとしたものジークの言葉の意味を考える。

俺が死ねば魔族は滅びるとジークは言った。

もし、まあ：絶対にあって欲しくないというか、必死で回避したいが：魔王として殺されたとしても、魔族がそれで滅びるとは思えない。

だって、有り得ないだろうっていうぐらいこいつらは強い。もし国々が揃って挙兵したとしても、勝つのは無理だろう。今まで人間がちょっとした掛けでも勇者ご一行が返り討ちにされるだけで済んでいたのは魔族が人間に何の興味も無いからだし、徹底気な個人主義っぽいせいもあるだろう。

俺の死は魔族の滅亡、がどうしても結びつかない。

「何だ、殺戮卿。俺たちの繁殖方法をまだ言っただけで無いのか？」

「狂将、言葉が過ぎる」

はん、とジークが鼻で笑う。

「なあ、魔王よ。『魔王』と呼ばれる者は今てめえ以外に居無いんだ。どれほど望もうと待とうとな。そして魔族を生み出し、次期魔王を生み出せる可能性もてめえにしか無い。てめえが何もせずここで死ねば、新しい世代の魔族は現われず、寿命を迎えたものから滅びていく」

ジークの言葉を俺はゆっくりと咀嚼していく。

「人間にとってこれほど効率の良い攻撃対象も無いだろう」

俺、ホントに瀬戸際に居るな。うん。

《22》

母さん、親父：何で死んだんだよ。しかも何の事情説明も無しに。はああ、と溜息をつくしかない。自分の置かれた立場は本当にどうしようも無い。

「何の能力も無いのに：本当に魔王なのかよ」

魔王を自覚しろと言われても、その自覚するための根拠が無くて自覚できるわけが無い。

「貴様がそう思っているからこそ力が顕現しない」

そう言うやジークは俺の腕を掴んで歩き出した。

おいおいおい。どこへ行く！？

「狂将！」

アグーとロウも慌てたように続く。

腕を振りほどこうにもびくともしない。俺が非力なのではない。

こいつが馬鹿力なんだ！！

「大人しくついて来い。貴様のような馬鹿に丁度良い手っ取り早い方法がある」

上司（仮）に馬鹿呼ばわりか：いいけどな。

嫌な予感しかない。精一杯お断りしたい！！全力で逃げたい。

アグーとロウにも助けを求めるような視線を送ってみるが：お前ら追いかけてきてる割に必死さが足りんぞ！！見捨てるつもりか！？

俺。絶体絶命！？

「どこに行くつもりだよ！！」

「すぐそこだ」

一瞬の闇の後に、眩暈のするパノラマが広がった。
どこここっ!?

トールのところで見た景色が良いなあ、なんてレベルでは無い。
この高さは最早恐怖だ。

びゅおおつと更に恐怖を煽るように風が耳元を通り過ぎていく。
ここまできて、『何するつもり?』なんて暢気に聞くほど察しは
悪くない。

お前! 俺をここから落とすつもりか!?

俺の内心の叫びを聞いたのか、ジークが振り返り、にやりと笑っ
た。

今まで見た中で最悪に凶悪な顔だ!

「心配するな。貴様がどれだけ否定しようと貴様は『魔王』だ。こ
こから落とされたぐらいで命を落としはしない。人間やめる覚悟が
出きるだけだ」

それが嫌なんだよっ!!

俺は必死にジークの手に爪を立て、暴れてみるが効果ゼロ。ああ、
ホント、マジにやめろ。

「では、さらばだ。また会おう」

「ふ……ざけんなあっーっ!!」

俺の体は宙に投げ飛ばされた。

心臓が掴まれるような急速落下。
目も開けられず、ただただ落ちていく。

ああ、俺は死ぬのか。

短い人生だったな。

とりあえず、死んだらすぐに文句を言う。馬鹿親父に。

・・・地面に叩きつけられるのは痛いかな？
そんなこともわからず、一瞬であの世かな？

「何やってんの？」

俺の危機的状況を無視するような呑気な声が掛けられた。

「ドール、うう、うっ!!」

落下は続いているので、風圧の関係で妙な声になる。

「楽しいの？」

誰が楽しんどるか!!!!!!

早く助けてくれ!!

必死でわたわたと…出来たかどうかはわからないが、気持ちだけは焦る…俺に不思議そうな表情を浮かべながらもトールはひよいと先ほどまでの落下が嘘のように俺を抱きとめた。

「カリ様、かーくほ！」

楽しそうだな。でも助かった!!!!恩に着るぜっトール!!

「それで何の遊び？僕にも声かけてよ」

「あ…遊んでねえっ!!突き落とされたんだよ！」

トールにしがみついたままで、俺は落ちてきたと思われる上空を睨みつけた。

それにつられるようにトールも見上げる。

「カリ様」

瞬間移動してきたらしいアグーが俺の様子を見ている…観察しているというのが正しいか。

ジークの行動を止めず、積極的に参加しないまでも容認して見ていたのは…俺の『魔王』としての覚醒を狙ったからか。

ぐっ、とトールに掴まる腕に力が籠もる。

わかるだろ？だって、助けなかった時点で共犯だ。

そして、何故かトールがくすりと笑いを漏らした。

「お前ら、馬鹿だね」

先ほどよりも楽しそうにトールが言い、アグーが顔を顰めた。

「今さら焦る必要も無いのに」

よしよし、と何故かトールに背中を叩かれる。

子供扱いすんなよ！…まあ、見た目子供にしがみ付いてる俺も俺だけ。

「大事なものは逃がさないってことだよ」

そこで、ぷつりと意識が遠のいた。

《23》

封印を。

我らの願いを。

気がつくつと、真っ暗闇だった。どこだよ、ここ。

手を伸ばしてみるが指先さへ視界に入らない。盲目の人間の気分だ。

『落ち着いて』

いや、別に慌ててな・・・て誰だ!?

『私は貴方の中に眠る者』

へえ：俺の中？・・・中？

不法進入か。

『・・・いえ違います。私は元からここに居ます』

でも俺は知らないけど。あんたのこと。

『私は貴方です』

意味がわかりません。すみません。（何で謝ってるんだ？）

『そういうものだとな納得して下さい』

わかりました。（わからないけど）俺は基本的に流されるタイプだ。

魔界なんてところに居るのを考えてもらってもわかると思うけれど。

・・・で、まああんたが俺だったとして、何の用？

『貴方は大いなる選択の刻に居ます。意味がわからないという気持ちもよくわかります。『カリ』には人として生きて欲しいという願いが込められましたから』

人として生きて欲しいって：人ですけど。ああ、いや：そういうえば魔王疑惑が。

べ、別につ忘れてたわけじゃないぞ！ちよつとした現実逃避つてやつだ。

あ・・・何か思い出してきたぞ。そうそう、俺突き落とされたんだっ！：温厚な俺でもここはキレて良いところじゃないか？

『貴方は選択が出来ます』

俺の葛藤は無視ですか。そうですか。

『魔として覚醒するか。このまま人として生きるか』
ふむ。

ここは迷ってみせるべきなんだろうか？全く悩まないけどな。

だってな、魔として覚醒したとしても面倒が増えるだけに思える。それなら人として細々と漁師をしてたほうが絶対に良い。

『・・・そうですか』

そうですよ。

『では、勇者としての道を選ぶというわけですね
こら待て待て待てっ！何でそうなる！？』

俺は魔族になる気は無いと言っただけで、勇者になるなんて一言も言っただけ無い！！

『人として生きるということはそういうことです
違うだろ。』

魔王か勇者か選べ、てどんな選択肢だよ！お伽話にも聞いたことねえよ。

どうかそこに『漁師』という選択肢も追加して下さい。

『選ぶことの出来ない夢は妄想と呼びます』

失礼だな！ちゃんと選べるって。いくら流されやすい俺でも勇者にも魔王にもなる気は無いからな。頷いた覚えなんて一度も無いぞ。

『貴方は、選ばなければならぬ』

だから選ばないって！！

『それで無くば・・・』

無くば？

「カリ様」

「あーっもうっ！いいところで！！！」

目を開けた先にはアグーが居ました。顔を覗き込んでます。
いい加減美形にも慣れてきたな。

「カリ様」

「何？」

「愚かな私にどうか罰を賜りとうございます」

「は？」

置きぬけのそんな台詞に目が点になった。何だ『罰』て。しかも
賜るって。

「カリ様を危険に晒し御身を守りきれぬばかりか、カリ様のお優し
さを踏みにじるような真似を致しました。この身を滅ぼされても仕
方なきこと」

いやいやいや。

確かに俺はジークに突き落とされました。アグーが止めなかった
ことにも腹を立てました。

でもさ、やったのはジークだろ。つまり元凶はジーク。

ジークが謝るんならまだしも、アグーが謝るのは筋違いだろ。そ
の上罰するなんて有り得ん。

・・・とは言え、それじゃ納得しなさそうだなあ。

出会った当初から融通きかなそうな奴だったもん。

「アグー」

「はい」

頭を下げ、アグーは俺が罰を先刻するのを肅々と待っている。

うん。そうだ。こうしよう。

「アグー。顔を上げろ」

「…は」

俺はにっこりと笑い、拳を握った。

うん。男なら拳で語れ。

親父もよく言っていた。
そう言うわけで。

「これでチャラな！」

俺は容赦なくアグーの顔を殴りました。

…全国の美形ファン。どうか石を投げないで下さい。

「あっははははは!!」

腹を抱えて笑っているのはトールだ。

そんなに笑うところか？俺がアグーを殴ったのって。

「だってよくあの顔を殴ったね。カリ様にしか出来ないし、あいつも許さないだろうな。それで殴った手は大丈夫だったの？痛めなかった？」

「…慌てたアグーにすぐ治療されました」

殴られたことなどお構いなくアグーは俺の手を心配した。馬鹿か。そこで再びトールが笑う。お前は笑い上戸だったのか。

「トール」

「うんうん。それでどうしたの？用がなくても来るけど、用があったて呼んだんでしょ？」

「俺は本当に『魔王』か？」

「間違えたりしないよ。カリ様以外に魔王は居無い」
一点の疑いもなしか。

「魔族って何で魔王以外に子供が生めないんだ？」

それがそもそもおかしいだろ。

「おかしくは無いよ」

「だから何で」

「生殖能力は特別な力なんだ。聖と魔の力をその身に宿す者で無ければならない。僕たち魔族は『魔』の力しか持たない。竜族や神族だって同じで『聖』の力しか持たない。人が何の疑問もなく子供を増やすのは彼等が『聖』と『魔』の力を合わせもつからにならない
へーへー。そうなんだ。

「つまりその理屈でいくと魔王は両方の力を持つってわけ？」

「その通り！」

大当たりくとツールはぱちぱちと手を叩く。

「魔王様は己の後継者を一人しか産めない。それは自分の力をそのまま後継者に渡すからだよ。聖と魔の力をね」

うーむ。やはり疑問が。

「何で魔王だけ？」

「魔王様は神様だからね」

何ですと。

「正しくは『元』神様かな。ずーと昔々に天から堕ちてきた神様。何で堕ちてきたのかは詳しく言わなかったらしいけど」

セオリーから行くと禁忌に手を出したとか、勢力争いに負けたとかか。

「でもこの魔界を作って悠々自適に暮らしたらしいよ」

「…平和だな」

「うん」

そうか。天界に喧嘩を売ろうとはしなかったんだな。

「諦めて」

「んあ？」

「カリ様。貴方を見つけたからには僕たちは逃がさない。だから人界に戻るのには諦めて」

いやいや。そこで簡単に諦めてたら悪あがきしてないだろ。

「お前らって…勝手だな」

「魔族だもん」

「ああ、そう」

そういい切られると後が続かんだろうが！

「わからないなあ。人間って贅沢とか酒池肉林とか最強とかって大好きなんじゃないの？」

「人によるだろ。だいたい酒池肉林って・・・」

相手が男ばかりで何が嬉しいか。むしろ悲しみでいっぱいだ。
「時間はたっぷりあるから大丈夫。長期戦には慣れてるから安心して」

できるか！

ああ・・・右を向いても左を向いても変な魔族ばかり。

どうしたものだろうか。俺の貧しい脳では打開策は一向に浮かばない。

『見つけた』

「へ？」

「どうしたの？」

「いや、今何か…」

俺は周囲を見渡したが、ツールと俺以外に誰も居無い。

くすくすくす。

ゆ、幽霊か！？

《25》

「カリ様！」

突然、ツールが険しい表情になり俺へ手を伸ばした。

「くそっ」

だからどうした？

いったい何に反応しているんだろうかと疑問を抱いた瞬間、目の前に光が突き刺さった。

何事！？

「眩しっ」

『会いたかった』

眩しさに目を覆った腕に誰かが触れた。ツールでは無いだろう。誰だ？

『我が兄上様』

俺は一人っ子だ。親父に隠し子が居なければ。・・・バレたら母さんに殺されるのでその可能性は低い。

腕を下ろし、相手を視界に入れた。

「・・・・・・」

何か、光ってますよ。疑似太陽の影響とかでなく、目の前の人（人なのか？）自身で発光している

そんな発光体は身内にはおりません。

「カリ様っ離れて！」

『黙れ。穢らわしき魔よ』

俺に向けていたのとは正反対な冷たい言葉が突きささる。表情も冷たい。見事なほどの変わりっぷりだ。発光している腕がトールに向けて上げられるのを見て俺は咄嗟にその腕を掴んだ。何か知らないがヤバそうな気がしたのだ。

『兄上様？』

「あんた誰？」

取り敢えず名乗りやがれ。

ふ、と発光体の表情が曇った。

『私をまだお怒りですか？』

・・・だからお前のことなんか知らんと言ってるだろうが。

「誰と勘違いしてるのか知らないけど、俺はあんたとは初対面だぜ」
『いいえ。貴方は私の兄上様でらっしゃいます』

だからそもそもお前は誰なんだ。

「忌々しい神族がっ！」

ん？うおっ！

俺の横を衝撃波が通りすぎた。危ねえなおいつ！

「遅いっ殺戮卿！」

トールが向こうから叫ぶ。アグーか。

「カリ様。私の後ろに」

守られてばかりか。カッコ悪いな俺。

『穢れし者が兄上様の傍に在るとは万死に値する』
「陛下に見捨てられた者が吠えるな」

あー、気分的に火花が散ってるな。何でそんなに陰悪なんだか。発光体は神族だって言ったよな。やっぱり神と魔は仲が悪いのか？

トールは魔王は元神様だって言ってたもんなあ・・・ん？

「なあなあ」

睨みあつてるところいけません。

「もしかして、そいつが言ってる『兄』って初代の魔王のことじゃねえの？」

勘違いしてるなら言ってやらないとな。もうそいつは居ないんだって。

『私が兄上様を間違えることはありません』

でも実際、間違えてるしな。

「間違えてることを認めるのは恥ずかしいことじゃないぜ」

『私に間違いはありません』

強情なやつ。私が正しいって？　そういうやつに限って間違えてるんだよなあ。

『このような場所にいらっしゃるからです。お痛わしい。私が兄上様を天へお連れします。昔のように過ごしましょう』

どいつもこいつも思い込みが激しすぎるだろう。

「カリ様は我らが魔王陛下。神などの出る幕は無い」

『私から兄上様を奪った薄汚い魔めが』

お前らどっちもどっちだぞ。そんなだから初代魔王に逃亡？　されるんだ。

「なあなあ」

「『はい』」

息ぴったりじゃん。

「これ以上俺のこと無視して話するんなら、二度と話聞かねえけど。いい？」

「『……………』」

アグーも発光体もびたりと口を閉じた。

やれば出来るじゃん。

「それじゃ、自己紹介からどうぞ」

発光体を指名してやる。

『兄上様…、私は貴方の弟のミーキアクリウオアです』
……。ミカで良いな。

「アグー。こいつって魔族の敵なの？」

「魔族というよりカリ様の敵です」

『愚かな。私が兄上様の敵になどなろうはずが無い』

あー、また言い合いが始まりそう。

「俺が指名した時以外の発言禁止。破ったら一生無視な」
静かになった。

「…で、ミカ。名前はわかったけど、お前は『何』なの？」

『兄上様…昔もよく私のことをそう呼んで下さいました』
やべ。何かうつとりしちゃってるぞ！？

『私と兄上様は天を統べる兄弟神。二人で一つとなる番いの神です』
番い、ねえ……。

『兄弟であり、恋人であり、夫婦でもあります』

俺はかつくり、と首を落とした。またそのパターンか。

『しかし、ある日些細な誤解により喧嘩となり…兄上様は天を飛び出していかれたのです。そのまま魔界へと棲みついてしまわれ、私にはお迎えにあがることも出来ませんでした。しかしつい先頃閉ざされていた結界が解かれ、私は兄上様がお怒りを解いて下されたのだとお迎えに参りました次第』

結界が解かれたのか。へえ、ふーん。そんな変わったことがあったのか？

トールに視線をやると、さあねとばかりに肩をすくめる。
では、アグーへと視線をやると・・・何だか眉をしかめている。
心当たりあるのか。

「アグー。結界なんか張ってはったのか？」

「初代魔王陛下が、神族避けに張ったと伝わっております」

そうか。激しい兄弟喧嘩だったんだな。結界張ってまで弟に会いたくないなんて。

・・・ま、この弟じゃ無理もねえと思うが。

しかしそれが何で解けたんだ？

「魔王様が張った結界は魔王様にしか解けない。つまりカリ様が解いたんだらうね」

え！俺！？

いやいや、そんな心当たりは全然無いぞ。

「カリ様。狂将に突き落とされたでしょ。原因っていったらそのくらいじゃない？」

ジークか。あいつか。トールに促され、不快感がこみ上げる。

今度会ったら絶対に殴ってやる。

「あーあ、余計なことするから裏目に出ちゃったねえ」

トールの言葉は揶揄するようで、いったいどちらの味方なのやら。
俺はどっちの味方でも無いけどな。

「結論を言う。俺はお前の兄とかでは無いし。魔王でも無い。以上！」

はい。帰った。帰った。

ついでに俺も地上に帰してくれ。

《26》

魔王は元神様だったのか。知ったらみんな驚くことだろう。しかも魔王になった理由が兄弟喧嘩が原因とくる。俺なら色々馬鹿らしくなってくる。

『兄上様。私と共に帰りましょう』

その先が地上だって言うんなら迷わず手を取ったんだけどなあ。

そう言おうとした俺の目の前でミカが真っ二つになった・・・
ておい!?

驚いた俺の前に：真っ二つになったミカの間から新顔が現われた。
おいおい。何だこの超無表情なくせに色気ぶんぶん撒き散らした
奴は。歩く公衆猥褻か!?

「デウキュリエド。戻ったか」

「遅くなりました。殺戮卿」

手に持っているのは真っ赤に染まった大剣で：刀身が赤いってどんな金属だ?

「陛下。これに在るはデウキュリエド。魔騎士筆頭にございます。
見知りおき下さい」

デウ：デュークは俺の前に歩み寄ると膝をついて頭を下げた。
おお。こっちにきてからこんな礼儀正しい奴って始めてじゃない
か?

「デウキュリエドにございます。御身をお守りする第一の剣。どうぞ

見知りおき下さい。命をかけて陛下をお守り致します」

あー・・・うん。女だったら一発で落ちたんだろうが生憎俺は男で。男に色気振り回されても暑苦しいだけだ。

「…よろしく。デューク」

守ってくれるって言うんだったら、頭は下げておくけどな。

いや俺も男だからただ守られるだけってのは癪に触るけど…ドラゴンに素手で勝てないからって悔しがったりするのは、何か違うだろ？それと同じだと思えば。

「ところでミカは？」

真っ二つになって消えたけど何処にいったんだ？

「本体では無く幻影です。デウキュリエドによって退散させましたが、猶予はなりません。陛下。どうぞお力をお貸し下さい」

「は？」

魔族に力貸せって言われても何も持ってません。

「御手を」

「へ」

差し出されたアグーの手に、俺は反射的に自分の手をのせた。

後々、ツールに警戒心の欠片も無いよねとせせら笑われるが…仕方ないだろ！

突然ぐにゃりと歪んだ視界に慌ててアグーの手を強く握る。

眩暈か！？地震か！？

「大丈夫ですか？カリ様」

ぱちぱちと目を瞬くと、また違う部屋に居た。

瞬間移動は楽で良いが、するならするって言ってくれ。

「ここどこ？」

「魔界の心臓部。豊かな恵みの全てはここから始まります」

ほの白い光に照らされた部屋の中央に光の塊が浮いている。白い光がきらきらと輝いているが、目を射るような光では無い。包み込むような穏やかな明るさだ。

「あれは魔王様の力の欠片です」

「へ!？」

「いつも定期的に力を注がれていました」

「へ」

俺がやったことは無いから、前の魔王の力がそのまま残ってるってわけか。

長持ちだなあ。

「カリ様にもしていただきたいのです」

「俺が!？ムリムリ!」

慌てて首を振った。だって俺は何の力も無い。
やれって言われたって無理だ。

「カリ様。この魔界魔族は初代魔王によって創造され、その力によって維持されています。：一年前はもっと大きな光でした。それが少しずつ小さくなり、いずれは消えるでしょう」

「：消えたら?」

「魔界は消滅します」

大事じゃん!？

「しょ、消滅って：どうするんだ?」

「そうなれば、我々魔族は地上を棲家としなければならなくなるでしょう」

「地上を：」

「人と魔の共存は難しい。我々は対立せざるおえなくなるでしょう：今よりも更に。勇者のお遊びの相手をする余裕も無く」

反射的に俺はアグーを見上げた。

「魔族と人間の対立?」

人間なんて目じゃないほどの力を持つてるのに、こいつらでも魔界の維持は出来ないのか。

魔王でなくては。

「カリ様。どうかお力を：我々に」

白球が俺の目の前に降りてくる。
俺はどうしたらいいんだ？

ああつくそっ！男は度胸だ！

「どうやれば良いんだ？教えてくれ」

「カリ様！」

感動するのは後でいいからさ。成功するかもわかんないんだから。

「難しいことはありません。光玉に御手を翳して、この世界を感じて下さい」

「ん」

また抽象的だな。

言われるままに手を翳し、俺は目を閉じた。

・・・何も感じない。熱も世界も。失敗か！？

が、ふと気を抜いた瞬間何かに押し潰されるような感覚が襲った。

何だ！？

「カリ様！」

しかし光玉から手は離れない。おいおい。

「大丈夫です。カリ様、お心安らかに・・・私がお側に付いております」

ガクツと足が崩れ落ちそうになるのを後ろから支えられる。

手の先からすうと引っ張られているような何か・・・吸いとられてないか！？ 大丈夫なのか：このまま俺が骨と皮になっちゃう

うなんてこと無いだろうな・・・

「カリ様」

耳元で囁かれ、鳥肌が立ちそうなところだが、そんな余裕も無

い。

「素晴らしい・・・ご覧を」

何が。

アグーに促され視線を上げると・・・

「な・・・っ」

あり得ない大きさになった光球が浮いていた。

さっきはウキぐらいの大きさだったのにでかくなりすぎるだろ
！？

「この短時間であれほどの光球になるとは、さすがカリ様。お見事です」

複雑な褒め言葉だ。つーか全然嬉しくない。 ともかく。こ

れで一先ず俺はお役御免でいいな。もういいな！

ではお休みなさい。

耐えられないくらい瞼が重い。

「カリ様：ありがとうございます。ゆっくりお休み下さい」

ふわりとした浮遊感とともに俺の意識は闇に落ちた。

++++++
++++++
++++++

貴方は選らばなければならない。
神であり、魔であり、人である。

わかってる…わかってる！そんなことは、俺自身が一番よくつ！
それでも選べないから…困っているんだ。

神は…あいつは…鬱陶しいとは思うが、弟だ。切り捨てる
ことは出来ない。

そして魔族たちも…彼らは俺の子供たち…愛しい存在だ。

ならば。

ならば…。

「おはよう。カリ様」

「…おは…おういっ!!」

挨拶に挨拶を返そうとした俺は、上に乗っかるツールに突っ込み
をいれずにいられなかった。

「何やってんだっ！」

「ん？カリ様襲ってる〜」

「アホかっ！」

退かそうと起き上がろうとした俺は…

「へ…」

「ムリムリ。力入らないでしょ？力使い過ぎたね」

イイ笑顔でトールの顔が近づく。

待て待て！…俺、ピンチか！？

「ちょっ…！」

もそもそと腹の中に手が入り込んでくるのに本気で危機感を覚える。

「いい加減に…っ」

「覚悟は決めた？」

「何…？」

「思い出したでしょう？カリ様…陛下。ご自分が『何』であるか」

「何って…俺はだからっ漁師だって！」

必死で言い募る俺に、くすりと笑う。外見こそガキだが、ガキがする笑い方じゃない。

「誰よりも優しく、誰よりも残酷な」

歌うようにトールが紡ぐ。

「我らが父、我らが母。魔王陛下」

「…」

「貴方無くして、我ら魔族は存在できない」

青年姿に戻ったトールが、俺の動きを戒める。

「諦めて…我らは貴方を逃がさない。神にも…人にも渡しはしない」

「だーかーらっ！俺はただの人間でっ…魔王とかそんなの関係ないからっ！」

諦めろといわれて諦められるかってんだ。

「頑固だね、カリ様」

「あ、そうですねって頷けることと頷けないことがあるんだよ!」

「うん。だからさっさと既成事実を作っちゃおう」

何ですと？

「大丈夫。痛くないように、じっくり解してあげるから」

ナニをですか!?

「私に任せて。天にも昇る心地にしてあげよう」

「頼んでも無いっ!!」

口調まで変わったトールを何とか押しのけようとジタバタしてみ
るが効果なし。

誰か! 誰か! こういう時こそ助けるよっ!!

「凶王子」

「デウキュリエド」

「デューク!」

第三者の登場にも関わらず、体に触れるトールの手の動きは止ま
らない。

止めろよっ!

「陛下の意思に背く行いは制裁に値する」

「カリ様は嫌がっていない。照れているだけさ」

「全力で嫌がってるよっ! ひっ」

こらーっどこ触ってんだっ!!

「顔を赤くして! 愛らしい」

ひいっ! 鳥肌立つようなことを言うんじゃない!

「ロープ! ロープ! デュークっ! 助けを求む!!」

必死で伸ばした手をデュークは掴み・・・力の限り引っ張りや
がった。

手、抜けるからっ!! 加減を知れ!! いや、助けて貰って文句言
うのもなんだけどな。

「：邪魔するなら、お前も始末するよ？」

おいおい物騒な。

「私は陛下の騎士として、陛下をあらゆる災難からお守りするのが務め」

「あー頭固いなあ。さすがアグドメゼドが選んだだけある」

ベッドから身を起こしたトールは胡坐をかいて、デュークの背中から威嚇している俺を面白そうに見つめた。

「カリ様。これは僕の優しさだよ。これが最後の機会だったのに」
そうだな。是非とも最後にして欲しい。

「僕に抱かれていれば良かったのにつて後悔するよ」

「それは無い」

女を抱き損ねて後悔することはあっても、自分が抱かれなくて後悔するなんて訳わからんことは絶対に無い！

「陛下」

うう、何か眩暈がするぜ。

支えてくれてありがとな、デューク。

「まだ本調子では無いんだから、無理しちゃ駄目だよ」

「誰がさせたと思ってんだよっ！」

怒鳴ってますますくらくらしてくるぜ。ホントにコイツは・・・

あー力が入らん。

「ちよっとそこ退け、トール」

目の前にすぐに横になれるベッドがあるのだ。これを逃さずしてどうする。

「そしてお前はどっか行け」

「酷い」

酷いのお前だ。

「俺は寝る。今度こそ邪魔するなよ」

しっしっとトールをベッドの上から追い払い、俺は安眠を確保する。

「カリ様」

「優し過ぎるといいうのも時には残酷だよ」

§ § § § § §

「あまりに似ていて惚れずにいらなかった」

「馬鹿ね。普通の女だったらそこで殴ってるわよ」

「普通の女は魔族を殴らないだろう？」

「ええ。だから私は普通じゃないから遠慮なく殴るわね？」

容赦なく女は男を殴った。その破壊力たるや、相手を10メートル先まで吹っ飛ばしたほどだ。

「…この程度で済んでよしとするか」

「その通りよ」

特にダメージを受けた風でもなく男はしっかりと立ち上がる。

「ほら、喜んでるわ。この子」

「…全くつれないな」

「赤ちゃんにつれないも何も無いでしょ。ホントに馬鹿なんだから」
女は男を貶しながらも、抱く赤ん坊に慈しむ視線を向けた。

「可愛い子。貴方は私とリクの子供よ」

愛しい。愛しい。

「愛してる。愛しているよ」
愛さずにはられない。

我らが父よ。

《29》

目覚め時に感じた気配はひっそりしていた。

まあ、どれだけ部屋数があるのかわからない魔王の城だ。人…いや魔の気配が感じられなくても不思議ではない。…たぶん。

さてと。どうするか。

目覚めは、ぼちりくつきり、はつきりすぎる。

力を使いすぎたという俺に遠慮してなのか、周囲には誰も居無い。これぞ絶好の機会。

よし。

カリは決意した。

§ § § § §

大気は力に満ち溢れている。

魔族はその力を己が身に取り入れて糧とする。食物を摂取するのは補助でしか無い。

ああ、だから魔族は人間界や天界では長く生きていくことが出来ない。

悲しい。哀しい。憐れな生き物だ。

「もうあそこには戻れない」

父が居て、母が居て。普通の人の生活があった。

さあ、どうしようか。魔族が嫌いなわけじゃない。だって我が子も同然。

ただ縛られるのが嫌なのだ。

俺は気紛れで気分屋で、我が儘だ。自分のことしか考えない。

「優しくなんてねえんだよ。俺は傲慢なんだ」

魔力も補充されたし、当分は平和に暮らせるだろ。その当分の間は『人』を満喫しよう。

漁師だ。漁師！

記憶も魔力も消してまた一からやり直した。

うんうん。前回は魔族を『親』にしちゃったから悪かったんだよね。普通の人間にしよう。

魔族と俺と神族と。永遠に続く追いかけてっこだ。

「じゃあな」

長い生を生きる者同士。また会うこともあるだろう。かなりの確立で。

俺に執着する魔族たち。そして弟。諸々の人外ども。

それでいい。

俺の糧はその執着。その強い想いが俺の存在意義となる。

愛してるさ。お前たち。

だから。また会おう。

《29》（後書き）

短いですが区切りました。

次からの第二部は三人称でお送りいたします。

第二部 《30》

それが造られたのは気紛れだった。

神はふと、己と同じものを造ろうと思いついた。

「成れ」

言葉は力となり、神と同じ形が現われた。

面白いことに自分と正反対の色を持つその『形』を、神は『弟』と定義した。

「今からお前は俺の弟な」

成ったばかりの形は与えられた言葉に頷いた。

「名前はそうだな…ミーキアクリウオアで良いだろ。長いからミカって呼ぶけどな」

「兄上様」

「おう、弟よ」

こうして、初めて神は『会話』することを識った。

§
§
§
§
§
§

冒険者ギルドは至るところにある。

その規模には大小があるものの、それだけ需要があるということだ。

このダレイストンの街にもギルドはあり、様々な人間が出入りする。

「うーん……」

依頼はギルドが受け付け、魔法のボードにその冒険者のレベルにあったものが呼び出される仕組みとなっている。その前で冒険者たちは自分の希望にあった依頼を探すのだ。

「やっぱり一人で受けるってのは限界があるなあ……」

冒険者の多くはパーティを組んでいる。そのほうが依頼成功率は高くなるし、より利益になる依頼を受けることができるからだ。単独で動く冒険者はよほどレベルが高い者か、駆け出しくらいだろう。彼が所持している冒険者カードのレベルは12。初心者とはいえないが、熟練者では全く無い。

「ガウバウの実の捕獲：トンネレコの退治。どっちかなあ」

ガウバウの実はその名の通り『肉食』の植物だ。料理によく使われる。

トンネレコは畑に穴をいくつも開けてそれを繋げてトンネルにしてしまうという農家泣かせの害獣だ。

「期限が長いほうにしようか」

ガウバウの実の依頼をぼちちと選ぶと、それがギルドに申請され

る。

受理されれば冒険者カードに依頼の詳細が届くという、何とも便利なシステムだ。

「よし」

彼は頷いてギルドを後にした。

ダレイストンの街は普通に賑わっている。

大通りには露店が並び、昼時になれば更に人が増えるだろう。

彼はガウバウの実を捕獲するのに必要な丈夫な綱と棒を購入し、棲息地である街外れの森へ向かう。

「今夜のメシのためにも頑張らないとなっ！」

高位の冒険者たちの間では、魔王復活が話題になっているようだが一般人レベルの冒険者には御伽噺の世界だ。だいたい古今東西、紆余曲折あるうとも勇者が勝つようになっていく。

つまり魔王復活なんて世間話程度に平和だった。

平和なのはいいことだ。

「・・・ホント、しみじみ痛感する」

びゅんびゅんと棒の振り具合を試しながら、青い空に流れる白い雲をぽかんと眺める。

するとキラリと何かが光った。

「…ん？」

それは徐々にはっきりとした形になって：

「おいおいおいっ」

慌てて退いたその場所に槍が突き刺さった。

「な・・・っ危ねえーなっ！ 槍のポイ捨ては犯罪だぞっ！！」
空に向かって叫ぶ。

「すまーんっ！ 手元が狂った！」

森の方から声が届く。

見れば男が手を振りながら駆け寄ってくるところだった。

「おまつ、手元が狂ったとかそういう問題じゃないだろっ！危なく突き刺さるところだったぞ！」

「あーわりわり」

軽すぎる男の謝罪は風貌通り。さして気にしている風も無い。

赤いツンツン頭をがりがりと掻いている。

「ちよつとすっぱ抜けちまってな。刺さらなかったから大丈夫だろ」

悪びれない男の台詞に、小さく溜息をついて肩を落とした。こういうタイプの男に何を言ってもこちらが疲れるだけだ。

さっさと自分の依頼を遂行しようと森への道を歩き出す。
が。

「・・・っ」

肩を掴まれ引き戻される。

「あんた、一人？」

「・・・そうだけど」

「一人じゃ危ないよ？」

「・・・俺は一応冒険者だ」

「え？・・・でもなあ」

男は彼の上から下まで視線を流し、顎に手を当てた。

「その格好からすると魔法使いなんだろう。体もちっこいし、一人で森に行くのは危ないぜ」

「余計な世話だっ！俺のことは放っておいてくれっ」

自分で一人前だと思っている人間ほど密かに気にしているコンプレックスをつかれると怒るものだ。

頭から湯気が出そうに怒った彼は頭からすっぽり被ったローブを翻して森へと向かった。

「あー…行っちゃった。モンスターが丁度大量発生してんだけどな

あ
」

男の視線は小さな背中を追った。

《31》

森の異常事態については、近づく者ならば誰でも感じ取っただろう。

それほどに魔物やら人の悲鳴が鳴り響いている。

どうやら彼は最悪のタイミングにやって来たらしいと嫌でも実感する。

「うわ、どうするよ…帰るか？…でもなあ依頼遂行出来なかったらペナルティあるしなあ」

それがあるからこそ比較的楽なレベルの依頼にしたのだ。

「ま、いいか。遭遇しなければいい話だしな。うん。自分の運の強さを信じて！」

そういう人間に限って運とは縁もゆかりも無いものだ。

とは言ってもガウバウの実というのは比較的森の外側に生息している。高レベルのモンスターと出会うことも少なく気をつけることと言えば、収穫の際にガウバウの実に噛まれることぐらい。

普段はこの森も比較的静かなのだが、先ほどの冒険者の言葉のようにざわざわと落ち着かなく『どどどどど』という不気味音も響いている。

「さっさと採って帰ろ」

ガウバウの实の面倒なことは群生しないことだ。1本その場所に生えていれば周囲2、30メートルは離れなければ生えていない。多く採るためにはその1本に出来るだけたくさん実をつけている木を見つけないならぬ。

特徴的なオレンジ色の実を探そうと彼は視界を上げた。

そしてバッチリと合ってしまった。

明らかに木の上から彼を狙っている獰猛そうなモンスターと。

「げ」

一瞬の間があって、互いに行動を開始した。

モンスターは跳躍の姿勢となり、彼は慌てて逃亡した。

「いやっ普通に考えて逃げるの無理だろっ！……待て……！」

彼の命令でモンスターが一瞬で急ブレーキをかける。

シュンッ！

彼の脇を何かが飛んでいった。

それはモンスターの眉間に突き刺さる……どうやら槍だったようだ。

「だから言っただろ。危ないってさ」

先ほど出会った男だった。

「聞いてねえよ！」

「あーそっかそっか。ま、間に合ったから結果オーライってことで……っしょ」

絶命したモンスターに近寄り、突き刺さった槍を抜き取る。

「今この森はさモンスターが大量発生してんの。ギルドのほうにそろそろ報告いってるはずなんだけどなあ？」

「そんなの聞いてない！」

「ま、そういうこともあるさ」

「あってたまるか！」

怒り心頭の彼に対して男はどこまでもマイペースだった。

「こっちはレベルも低くて、モンスターなんて遭遇したら死活問題なんだ。安全だと思ったからこの森の依頼を受けたのに、そのへんきっちり管理してもらわないと」

「あんたレベル幾らなん？」

「……10」

「うわー駆け出しだあ」

男の言葉にむっとした気配を感じた。

「良いんだよ。ぼちぼち安全な仕事を選んでレベル上げてるんだから！そういうお前は幾らなんだ？」

「俺？俺は57」

レベル50を越えると中堅どころ。彼のようにガウバウの実の収穫などしていてなれるレベルでは無い。

「あんた魔法使いなんだよな？」

「…一応」

「治癒とか補助とかできるんだ？」

「少しだけなら」

「だったら俺の仲間にならないか？いやあなかなか単独にやってる魔法使いっていなくてさ」

「断る」

「え。何で？」

「仲間なんて必要ない。俺は一人で十分」

そういうことで、と彼は町のほうへ向かう。モンスターの大量発生が原因で依頼が遂行できないのならばペナルティの対象にはならない。

「待って待って。俺が居たらさっきみたいな状態になっても助けてあげられるよ？」

「必要ない。助けてもらう理由もない」

彼は男の言い分をあつさり切って捨てる。

「そう言わず！レベルも楽に上がるよ」

「別に上げたいと思ってないからいい」

「でもさ」

「しつこい」

そんな遣り取りが町の入口まで続けられた。

《31》（後書き）

どうもお久しぶりです（ホントにな／＼汗）

第一部とどこが話が繋がってんのか、て謎ですが。たぶん、そのうち繋がります…たぶん（おい）

《32》

モンスター大量発生の情報はどうやら彼とは入れ違いにギルドに入ってきたらしく、キャンセルに違約金は発生しなかった。

「なあ、あんた名前は？」

しかし問題は違約金だけでは無かった。

見た目の軽さとは反して執念深い槍の男が、彼の後をついてくる。曰く、『俺の仲間にならないか？』ということらしい。

「あんたしつこい。別に俺なんて低レベルを誘わなくても、自分に見合ったレベルの奴を誘えよ」

彼の言葉も最もだ。

「えー。だってそういうのって無闇にプライド高くて面倒だろ」

男の無神経な台詞にフードの奥で彼は目を細めた。

「それに俺と組んだら依頼の幅も広がるし」

「だーかーらーっ俺は・・・っ!？」

彼が振り向いた瞬間、男がフードに手を掛けた。

露になる彼の顔。すぐさま奪うようにフードで顔を隠したがその顔は確実に男の目に晒されただろう。

「・・・へえ」

「何だよ」

「あんたすげー美人なんだな。フードをずっと被ったまんまだから何か隠してんだろうなって思ったんだが、なるほどな」

「うるさい。黙れ」

「ま、そう言わず。俺の名前はシ…」

「いらぬ。必要ない。どっか行け」

「…辛らつだねえ…自己紹介遮られたの初めてだわ」

彼は男の手を払うとすたすたと歩き出す。

向かった先はギルドの依頼掲示板だった。

そこに残っていた『トンネレコの退治』の依頼を選ぶ。

「そんな依頼よりこっちのほうが稼げるって」

脇からの声を一切無視して、彼は依頼の手続きを完了する。

依頼主と会って、詳細を聞く必要がある。

結局、男はトンネレコの依頼にまでついてきた。ただ本当について来ただけで依頼を手伝った訳では無い。

「あんた本当に何やってんだ？」

トンネレコを一掃したところで、それまでずっと無視し続けていた男に彼は話しかけた。

「お、漸く認めてくれた？」

「違う。一切無い。鬱陶しい。仲間になるつもりは無い。どっか行け」

多少しつこいものの友好的に接してくる相手に散々ない様だ。

「それでも俺、結構なお買い得だと思っただけどなく」

全く気にしていない。

「どうしても譲いてくれないなら力づくって手もあるけどどうする？」

「断る。訴える」

「男が男に犯されましたって？」

「……」

沈黙した彼に、男は笑みを深める。

あと一押しと思ったのか、男がもう一步彼に近づいた。

す…と彼の手が伸び、男の額に触れた。

「飛べ」

瞬間、男の姿が掻き消えた。

「ちっ。だから厄介なんだよ……人が地味に低レベルで生きてるのは何のためだ」と

まあいい、と呟いた彼は依頼の報酬を受け取りにギルドに向かう。依頼主からの完了の徴を渡して彼は報酬を受け取る。

「3銀貨か……先は遠いな……」

彼は海の青さを夢見て、今日も頑張っている。

彼……カリがそもそも冒険者などをやっているのは、偏に船をかうためだ。

漁の出きる船。最低でも1金貨が必要になる。

一発大きい依頼でも受ければ大した金額では無い。だが、目立つのを避けて地味な依頼で稼いでいれば貯まるものも貯まらない。その癖、よくわからない変態は引っ掛ける。

———
漁師になるのはいつになるやら。

《33》

いつものように細々とした依頼を探してギルドを訪れたカリは、空気が妙に緊張していることに気が付いた。

(何だ・・・?)

「あの…何かあったんですか？」

ギルドの受付に座っていた職員に話しかけると、職員も何やら深刻そうな表情だ。

「高位魔族が出たそうです」

いかにもこの世の終わりのような言い方だった。

「それは・・・大変だ」

「はい、大変です。どのような災厄が降りかかるのか想像すらできません」

「へ、へえ・・・」

カリは顔を引きつらせた。

高位魔族はそれほどまでに人間たちに恐れられているのだ。

「魔族の気のせいか、魔獣たちも活発化しているらしく昨夜から騒ぎになっているんです」

「・・・何か被害が？」

「在りすぎて依頼が山のように」

確かに数日前に来た時と違い、依頼板には多数の依頼が掲載されている。

「普通の人でも対応できるような魔物が凶暴化して田畑を荒らし、町を破壊しているんです」

「もしかして先日のもンスターの大量発生も…」

「はい、その可能性は高いというのがギルドの見解です。現在は高

レベルの冒険者の方々に魔物退治の積極的参加と魔族退治のメンバーの募集をかけているところだ」

「はあそうですか・・・俺みたいな低レベルは邪魔にならないように大人しくしとくしかないですね」

あははとカリは乾いた笑いを漏らしながら、トラブルに巻き込まれないうちにとギルドを後にした。

そして元凶である魔族から遠ざかるように隣国へと足を向けた。

「おおっ！お待ちしておりましたよっ！」

「は？」

隣国の国境の町。その門を潜ろうとしてカリは見知らぬオヤジに声を掛けられた。

「おっと。そうでしたなっ…私としたことがっ！貴方様がお忍びであることは重々承知しております。ささっ！どうぞこちらにお早くっ！」

「・・・いや」

恐らく人間違いをしていると思われるが矢継ぎ早のオヤジの言葉はカリに割り込むことを許さない。

あれよあれよという間に門を潜って、大きな屋敷に引っ張っていかれた。

屋敷の中も外同様、重厚感漂う造りで腰がひける。

「貴方様のお越しを今か今かとお待ち申しておりましたっ！早速で

すが…」

「ちょっと待った!」

このままなし崩しに依頼に入ろうとした男に何とかカリはストツプをかけた。

「勘違いしています」

「は？」

「俺は貴方が『お待ちしていた』という相手では無い、です」

「何故そのようなことを仰るのです!何か私どもが失礼なことを…」

更に勘違いの上乗せをしようとする相手にカリは己の冒険者カードを見せた。

「…レベル、1・・3・・13!？」

「おわかりいただけましたか?人違いです」

「素晴らしい!!」

「は？」

罵られるか悲嘆に暮れられるものと思っていたカリは予想外の反応に固まった。

「このように低レベルでありながらギルドの推薦を受けられるとは…」

「いえ、ですから…人違いです!」

このままでは訳のわからないまま、目の前の人物の依頼をなし崩し的に受けることになりそうな空気にカリは普段の怠惰な様が嘘のように辛抱強く人違いであることを主張した。

「な、なんと…では、貴方はカーリー様では無いと?」

「俺の名は『カリ』です」

よく似た名前が居るらしい。片方は凄腕冒険者で片方は駆け出しもいいところの弱小魔導師。

これで誤解は解けただろうということでカリは立ち上がって扉へ

向かう。

がしいいっつ！！！！！

「・・・何ですか？」

なぜか出口に向かうカリのフードの裾をわし掴む正体不明の勘違いオヤジ。

ちなみにその人物が何者なのかカリは未だに知らなかったし、知りたいとも思っていなかった。

「もう貴方でも構いませんっ！！！」

（いや構おうぜ・・・）

「わが国の姫をお助け下さいっ！！！」

「無理です」

そんなヤバそうな依頼を受ける気は毛頭無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3082/>

メテオ・ショック

2011年7月17日12時48分発行